

水の文化  
雨に寄り添う  
傘





雨でしとどに濡れた花。このしずくを美しいと思う心は皆同じなのだろうか



## 雨の音、傘の色

高橋 順子 さん

詩人

雨が降りだすと、驚くことに街には、あっという間に色とりどりの傘がひらく。このごろ気象情報も精度を増していることがあるが、そういうのをチェックしなくても、雲行きが怪しいときは人は折り畳み傘を持って出るのだが、どうもふだんから携行している人もいるようだ。

数年前トルコに行ったとき、現地ツアーガイドの男性は傘を持っていないと言っていた。じっさいかなりの雨でも彼は濡れて歩いた。でも雨はじきに止んで、カッパドキアの奇岩の間に虹がかかった。

日本では自分の傘を持っていない人はまずいないだろう。湿度が多いので、髪や服が濡れてしまったら、乾くまで時間がかかって、みじめな思いをするからである。

湿気といったら、息苦しい感じがするが、辺りに水分がたちこめているといったら、細胞にみずみずしさを与えてやれそうな気分がして悪くない。しとどに降る雨を室内から眺めていると、雨水が心の<sup>おり</sup>澱を流していってくれるような気さえする。私たちの心情にはよかれあしかれ、はっきり黑白をつけずに「水に流す」ことで、精神の安寧を得たいとのぞむものがあるようだ。もう一度すんなりやり直せるかもしれない、なんて思いながら、いつまでも

雨を見ていたい。

むかしはかさばって重たい、から傘をさしていた。竹の骨に紙を張って油をひいたもので、携帯には不向きなものだった。都会の子はもう<sup>こもりがさ</sup>蝙蝠傘だったかもしれないが、田舎の子だった私は子ども用の番傘をさしていた。新しい茶色の番傘は表面の油が固まっていてなかなかひらけない。父がベリッとひらいてくれた音、油のきつい臭いなどが思い出される。雨の音がバチバチはじけて景気がよく、「行くぞ」という気になった。雨のほうでも楽しそうで――。

いつだったか京都に行ったとき、土産物店でなつかしさのあまり、きれいな蛇の目傘を買ってきた。東京に帰ってから製造元を見ると、都内江東区ではないか。一人恥ずかしい思いをした。外国の人が日本土産に買っていくものだった。

私は<sup>すげがさ</sup>菅笠をかぶって歩いたこともある。数年前、連れ合いと四国八十八ヶ所のお遍路をしたとき、大雨の中でも「<sup>どうぎょうにん</sup>同行二人」などと墨書してある菅笠にレインコートで歩いた。雨の音しか聞こえない静けさもいいものだった。雨で濁った川のほとりを人間界を半分はみでているような、そんな気持ちで辿った。



高橋 順子 (たかはし じゅんこ)

千葉県海上郡飯岡町（現・旭市）生まれ。千葉県立匝瑳高等学校卒業。東京大学文学部フランス文学科卒業。青土社などの出版社に勤務。1993年（平成5）10月、作家の車谷長吉さんと結婚。1998年（平成10）から2004年（平成16）まで法政大学日本文学科非常勤講師。主な著書に『水のなまえ』（白水社 2014）、『雨の名前』（小学館 2001）、『時の雨』（青土社 1996）などがある。

# 特集 雨に寄り添う傘

水の文化50号 2015年6月

あなたは傘を何本もっているだろうか。ウェザーニューズが2014年7月24日に発表した「世界の傘事情調査」によると、日本の1人当たり傘所有数は「3・3本」で世界一だという。しかし、身近な存在であるはずの傘について、私たちはあまり深く考えたことがないのに気づく。

傘にまつわる最近の動きを調べると、高額ながら販売数をどんどん伸ばしている元気な国内メーカーがあることを知った。いつでも、どこでも、しかも安価で手に入るビニール傘は実に便利な道具だ。重宝されるのもうなずける。一方、それとは異なる傘の新たな流れや息吹のようなもの生まれつつあると感じた。

そこで今号の『水の文化』は、多くの人が使っていると思われるビニール傘ではなく、あえて、こだわりをもってつくられた傘やそれに携わる人・地域に目を向けた。こだわりの背後にある思いや情熱を知ること、ビニール傘も含めた日本の傘文化がはっきり見えてくるのではないかと考えたからだ。

雨の多い日本で、傘はどのように進化しているのか。果たして文化と呼べるものなのか……。海外との比較も通じて、日本人の傘に対する眼差しを探った。



上流から運ばれてくるさまざまな物資が荷揚げされた長良川の中河原湊跡と岐阜和傘（番傘）。和紙や真竹といった和傘をつくる材料は、かつてここから加納地区へと運ばれた（撮影協力：岐阜市歴史博物館）

## 目次

### 巻頭エッセイ

ひとしずく

#### 2 雨の音、傘の色

高橋順子

### 特集 雨に寄り添う傘

概説

#### 6 傘と雨と日本人

神崎宣武

資料

#### 10 日本の傘にまつわる略年表&傘の構造と和傘の工程

傘人1

#### 12 雨を楽しむ傘文化を提供したい

——福井洋傘の「まねされないものづくり」

橋本 肇

傘人2

#### 16 江戸時代から続く 岐阜・加納の和傘づくり

藤沢健一／大塚清史

Interview

#### 20 ファッションとしての傘

——イギリスとの対比から考える魅力とは？

中野香織

傘人3

#### 22 魅惑のフォルムをつくりだす アートと日本の技術力

ジョン・ディチェザレ

傘人4

#### 26 どこまでも理想の傘を追い求めて

林 秀信

コラム

#### 29 「傘の下の空間」と「雨に対する感性」

橋本 肇／大塚清史

地域レポート

#### 30 「弁当忘れても傘忘れるな」

——言い伝えが生きる金沢市の貸し傘

石川県金沢市

文化をつくる

#### 33 「傘の下の空間」を感じる文化

編集部

水の文化書誌 41

#### 34 雨水利用をやってみよう

古賀邦雄

### 連載

食の風土記 2

#### 36 水車によって広まった ほうとう

魅力づくりの教え 2

#### 38 郊外化した過疎地に生まれる、「ゆるさ」の魅力

——徳島県名西郡神山町

中庭光彦

Go! Go! 109 水系 7

#### 44 川と人が保つ〈ほどよい距離感〉 那珂川

坂本貴啓

センター活動報告

#### 50 ホームページ コンテンツ紹介

#### 51 編集後記／ご案内

(敬称略)

# 傘と雨と日本人

日本人にとって傘とはいったいどのような存在だったのだろうか。絵巻物や浮世絵を見てもわかるように、雨の多い日本では、笠（かぶり笠）や傘（さし傘）は人々にとって古くから身近なものだった。歌舞伎などの芸能や祭礼では、今も和傘が使われている。民俗学者の神崎宣武さんに、日本人の雨に対する感性と、歴史から見た傘の存在について語っていただいた。

## コンクリートの割れ目の雑草に驚く留学生

日本は雨の国です。日本と同緯度圏内に北半球の先進都市がほとんど入りますが、なかでも日本は圧倒的に降水量が多い。東京の年平均降水量は約1500mmに及びますが、これだけのアベレージをもつ都市はほかにありません。

開発が進んでも日本の山に緑が多いのは、熱帯雨林と同じように雨が緑を育てているからです。私は海外へ行くたびに、現地の子どもたちに山の絵を描いてもらうのですが、ヨーロッパだと鋭角的で険しい岩山、中国では枯山水の水墨画に近い禿山

を描きます。対して日本の子どもたちは、なだらかな円錐形の山を描いて緑に塗るわけです。

日本人にとって、山とは緑が生い茂っているもの。その樹木は雨が育てています。しかも、北海道・東北地方以外は年間を通じて比較的温暖な気候ゆえ植物が繁茂しやすい。例えば、乾燥地帯からの留学生が、春先や初夏にコンクリートの割れ目から雑草が生えているのを見て驚いています。こうした風景は日本ならではのものです。雨が豊かな植生をもたらしているのです。

1000m級の山頂まで樹木が生い茂っているということは保水量も多いわけです。そうした水が100



**神崎 宣武** さん  
かんざき のりたけ  
民俗学者  
旅の文化研究所 所長

1944年（昭和19）岡山県生まれ。民俗学者・宮本常一の薫陶を受け、武蔵野美術大学在学中より国内外の民俗調査・研究に従事。日本民俗学会会員、文化庁文化審議会専門委員なども務める。岡山県宇佐八幡神社の宮司でもある。『大和屋物語—大阪ミナミの花街民俗史』（岩波書店 2015）、『しきたりの日本文化』『江戸に学ぶ「おとな」の粋』（ともに角川学芸出版 2008）、『「まつり」の食文化』（角川学芸出版 2005）、『江戸の旅文化』（岩波書店 2004）など著書多数。

kmほどで海へ流れます。きわめて急峻な山地と水流。六十数%残っている山林が、海も育てています。「森は海の恋人」というのは、気仙沼で牡蠣を養殖する畠山重篤さんたちがよく使われるキャッチフレーズですが、こうした言葉が生まれるのも雨が豊かな国ならではのことで。

## 雨上がりに布団を干したがる日本人の感性

雨が多くの風土に生まれ育った日本人は、ことさら雨を敵にしません。かといって雨を特別な恩恵ともしない。常に一定量の雨が降るのは、長い歴史を通じて当たり前のことだと

無意識のうちに認識しています。昔から今に至るまで、雨を唄った流行歌が絶えないのも、日本人が雨とよくなじんでいる証の一つでしょう。

これだけ雨がよく降れば、雨そのものには慣れるしかありません。すると、むしろ雨が上がった後の対処に特徴が出ます。日本人ほど、布団をよく干したがる人たちは珍しい。

まるで強迫観念かのように、雨上がりの晴れ間に布団を干します。集合住宅のベランダにずらっと布団が並び光景は、世界の都市に類例がありません。布団は、ある意味下着と同じですから、それを何の抵抗もなく人前にさらすのは、これまた留学生たちが日本に来て最初に驚くこと



### 『一遍聖絵』

時宗を興した開祖・一遍を描いた絵巻。一行は黒い傘を持っている。お堂の縁側にも黒い傘が立てかけられたり、置かれたりしており、自由に開閉できる様子から、江戸時代の番傘のルーツともいわれている。

『一遍聖人絵詞』（いっぺんしょうにんえことば）[1]より。聖戒（しょうかい）撰／円伊（えんい）画（国立国会図書館蔵）

の一つです。

考えてみれば、晴れて布団を干す必要があるのは、湿度の高い梅雨時くらいのもの。布団を干す頻度がそれ以上に何倍も多いのです。昔は畳干しもしていました。その習慣が消えたのは、エアコンや防虫剤が発達したからではなく、部屋が狭くなり畳の上に家具を置きすぎるから。今、畳干しをするとなると一大事です。

雨上がりには傘も広げて干します。和傘は、直射日光が当たると和紙が硬化・劣化して破れやすくなるので陰干しが鉄則でした。だからかつて、番傘や蛇の目傘は干してもすぐ畳む暗黙の作法があったものです。今は洋傘ですから、無造作に庭などに出して干します。

### 『一遍聖絵』に見る和傘のルーツ

鎌倉時代の絵巻物『一遍聖絵』（一遍聖人絵詞）には、かぶり笠とさし傘の両方が描かれています。平安時代末期から鎌倉時代初期の『鳥獣戯画』にも、蓮の葉の柄を持っている絵柄があります。すでにこのころから、かぶり笠とさし傘が併用されていたと考えてよいでしょう。『一遍聖



『鳥獣戯画』(部分)

墨線のみで動物や人物たちを描いた絵巻。甲・乙・丙・丁の4巻は、異なる時代に、異なる人物によって描かれたとみられている。また、詞書がないため、何を目的として描かれたのかかわからないなど、謎は多い。12世紀(平安時代)に描かれたといわれる。(東京国立博物館蔵/Image: TNM Image Archives)



『木曾街道六拾九次之内 垂井』(9ページ)

世界的に著名な歌川広重の浮世絵。雨のなか、中山道・垂井宿の西の見附付近を通りかかる大名行列を描いている。傘をさして先導するのは本陣の主人といわれている。歌川広重画/1839年(天保10)ごろ(岐阜市歴史博物館蔵)

絵』には、親骨と小骨があつて黒く塗りつぶした傘が描かれており、のちの番傘にほとんど近い形です。

ただ当時、和紙を張ったものがどの程度あつたかとなると疑問で、布張りを考えざるを得ません。布の場合、日傘なら問題ないですが、雨傘では漏れないように布目を潰す塗りものが必要です。中世にはすでに漆もありますから、なんらかの塗料を用いたにちがいません。

『一遍聖絵』に描かれた旅姿の人々の身なりは粗末なものにもかかわらず、かぶり笠のみならず、さし傘も持っています。僧侶が抱えているのは長柄の大ぶりな傘が多く、これは念仏踊りや説教などをするときを使うもの。中世からすでに、今のような形の傘は、身近な道具だったといつてよいでしょう。

絵巻物には女性のかぶり笠も多く描かれています。これは「市女笠<sup>いちめがさ</sup>」といつて、縁に布を垂らしたかぶり笠です。イスラムの教義のように顔を覆うためというよりも、あくまでも生活の合理に則つたものだったと思われまふ。日差しや雨、そして虫を除ける用途だったのでしよう。

沖縄では、シユロ(くば)の葉を編み込んだかぶり笠(くば笠)が今で

もつくられています。通気性がよく、強い日差しから身を守ると同時に虫除けの機能もあるわけです。

### 傘が進化したのは機能を高めるため

江戸時代には傘屋が看板を掲げ、頑丈で大衆的な番傘とともに、漆塗りなど柄やろくに細工を施した高級品の蛇の目傘が売られるようになります。

当時、奢侈<sup>しじ</sup>を戒めた「さし傘禁止令」が出たとされていますが、江戸のお触れというのは額面通り受け取らないほうがよい。なぜなら古来、日本の法令文には「ただし」書きが付くのが常識だからです。物見遊山を禁じたとしても、「ただし、参宮、回国巡礼をする際は、それに及ばず」といった具合に。禁止令が出た当初は少し自粛したかもしれませんが、それをそのまま大げさに取り上げて意味がありません。

傘は、雨や日差しを除ける機能や強度を高くするため、材料や細工の進化を遂げました。それが本筋ですが、枝葉の役割としては、神仏が天から降りて鎮まる結界(天蓋)の表現でもあります。祭礼や芸能に、今



も和傘がよく使われるのはこのためです。

盆踊りでも、槽たぐらの上で音頭を取る人は和傘を持つことが多い。三重県の志摩地方には、傘に張り子の面やサイコロ、お盆の供え物などを取りつけて踊る慣習も残されています。盆踊りの和傘には、幾通りかの意味が見てとれるのです。

### ビニール傘から ドーム球場まで 今どきの「傘」事情

戦後、洋傘が普及し、日用品としての和傘は消えましたが、それは傘の歴史から見ると大きな変化ではありません。なぜなら、相変わらず家財道具の一つだったからです。

紙張りから布張りへ、竹の骨から金属の骨へと、材質が変化しにすぎません。かつて番傘の柄に筆で名前を入れていたのと同じように、高度経済成長期以前までは、洋傘の留め具の布の部分に木綿糸で名前を刺繍していたものです。つまり所有権を主張していたわけで、粗末には扱いませんでした。

傘の扱いが大きく変わったのは、ビニール傘の登場からです。所有権

を主張する家財道具ではなく、使い捨てになりました。ビニール傘に名入れする人はいない。安価で便利だから多くの人に受け入れられたわけで、傘の文化とは別の文脈で動く経済的な合理といえます。高度経済成長期に冷蔵庫や洗濯機が普及し、簡便性・効率性重視へと生活の価値観が大転換したのと同じ文脈です。

文化としての和傘の観点でいえば、日用品として復活するのは難しいでしょうけれど、絶滅文化財にしないためにも、せめて格式のある旅館などでは、下駄と和傘を残してほしいものです。真に高級な日本の伝統に触れる非日常の場を失いたくありません。

先ほど傘の枝葉の役割として結果について触れましたが、大傘、ないし天蓋のハイテクによる現代的な更新が「ドーム」ではないでしょうか。ドーム球場の急速な展開は、雨の多い日本ならではのことで、スタジアムより規模の小さい施設を考えると、たとえば出雲大社の近くには木造ドーム「出雲ドーム」があります。ドームも傘といえは傘。昔の人が見たら、さぞかし驚くに違いありません。

(2015年4月16日取材)

## 概説 雨に寄り添う傘

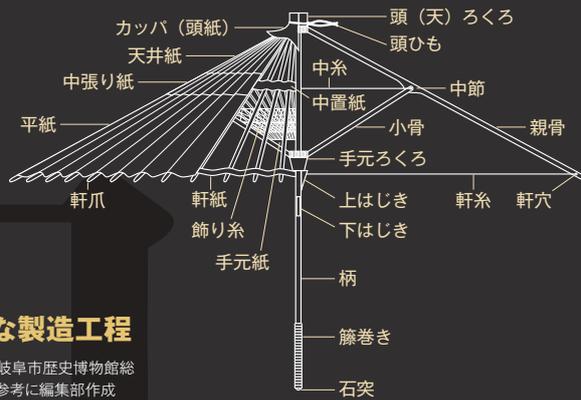
# 日本の傘にまつわる略年表

時代	西暦	和暦	出来事
古代オリエント			傘は古代オリエントが発祥の地ともいわれている。アッシリアやベルシャ、エジプトなどの彫刻や絵画には、王の頭にに従者が天蓋（てんがい）のように傘をさしかけている姿が描かれている
紀元前6世紀ごろ			ギリシャでは権威の象徴からやや一般化。身分の高い女性たちが日傘として用いるようになる
古墳時代	5世紀後半～6世紀		朝鮮半島から「蓋」（きぬがさ＝絹を張った長柄のかさ）が伝来したといわれる
奈良時代	720	養老 4	この年に完成した『日本書紀』に「蓋」の文字が記される
平安時代	12世紀		平安時代後期、和傘の存在が認められる
鎌倉時代	13世紀後半		『一遍聖絵』に、自由に開閉できる黒い傘が描かれている
安土桃山時代	1594	文禄 3	堺の商人・納屋助左衛門がルソンより現在の傘のような「ろくる式」を持ち込む
江戸時代	1639	寛永 16	松平光重が加納藩（岐阜市南部）に移封の際、金右衛門という傘屋を伴ってきたことが岐阜・加納の和傘づくりの始まりと伝えられている
	1673～88	寛文12～元禄元	婦女子の間で「絵日傘」が流行
	17世紀末		「蛇の目傘」が登場したと伝わるが、諸説ある
	18世紀初頭		大坂で「大黒屋傘」がつくられる。その後、印や判を入れて「判傘＝番傘」になったと伝えられる
中世からルネッサンス期			教皇や聖職者がステータスシンボルとして傘を用いたが、17世紀になると日傘が女性のモードとなり、外出時の必携品とされる
18世紀中ごろ	18世紀前半		青色の紙を張った「青日傘」が医師や僧侶に好まれ、18世紀中期以降は婦人の中で流行したと伝えられる
	1756	宝暦 6	永井直陳が加納藩 11 代藩主に。ひっ迫する藩の財政を救済するため下級武士に内職として和傘製造を奨励。地場産業としての基礎が確立
	1804	文化元	長崎に入港した唐船の船載品目に「黄どんす傘一本」との記述が見られる。これが洋傘として特定できる最古の記録とされる
	1854	安政元	ペリーが浦賀に来航したとき、上陸した水兵の行進で上官 3～4 人が傘をさしていたため、初めて洋傘が多数の日本人の目に触れた
	1859	安政 6	英国商人によって洋傘が国内に持ち込まれる。ただし、舶来品は庶民には手の届かない高嶺の花だった 加納藩領における和傘の生産が年間 50 万本を超える
	1860	安政 7・万延元	加納藩が傘問屋とともに「傘札」という名称の藩札を発行
明治	1868	明治元	『武江年表』という書物に「この年から庶民にも洋傘が普及しはじめた」と記されている
	1870	明治 3	大阪府で「百姓町人の蝙蝠傘、合羽、またはフランケットウ着用禁止令」が発令される。理由は、傘を持つ姿が明治維新で禁止された帯刀の姿と間違えやすいというもの
	1871	明治 4	『新旧文化の興廃競べ』に蝙蝠傘の流行が取り上げられる。当時輸入されていたのは、生地は絹や呉縞（ごろ＝毛織物）、アルパカ、木綿を用いた晴雨兼用のもの
	1872	明治 5	岐阜・加納の和傘生産が年間 146 万本を記録
	1880	明治 13	35 錢ほどの蝙蝠傘が流行。製造が間に合わないほどに
	1881	明治 14	東京・本所に設立された洋傘製造会社が活況を呈し、輸出も盛んになる
	1889～92	明治 22～25	素材を含めて洋傘の純国産化が実現
	1895	明治 28	傘の柄に刃物を仕込んだ護身用の蝙蝠傘が発売され、話題に
昭和	1940	昭和 15	日本和傘工業組合連合会が発足
	1941	昭和 16	全国和傘卸商業組合連合会が発足
	昭和 20 年代中ごろ		岐阜の和傘が最盛期を迎える。年産 1000 万本を超えた
	1953	昭和 28	国産のナイロンの洋傘生地が登場
	1954	昭和 29	スプリング式折り畳み傘が開発される ※新聞代（朝夕刊）が 330 円のとき、蛇の目傘は 1,170 円だった
	1958	昭和 33	ホワイトローズ株式会社が世界初の「ビニール傘」を開発
	1960	昭和 35	ジャンプ傘が登場する。当時は「飛上り傘」と呼ばれていた ポリエステル製の洋傘生地が開発される
	1963	昭和 38	全国の洋傘製造業者有志により日本洋傘振興協議会が設立
平成	1989	平成元	日本洋傘振興協議会が暦のうえて入梅にあたる 6 月 11 日を「傘の日」と制定

傘のリサーチおよび取材を通じて触れた史料・資料から、和傘と洋傘の歴史をシンプルに振り返った。なお、和傘の歴史についてはまとまった史料がなく、史料・資料によって記述が異なる点が多いので、あくまでも参考程度に見てほしい。洋傘にまつわる歴史については、日本洋傘振興協議会の協力で得た資料から一部を抜粋して記載した。

# 傘の構造と和傘の工程

## 和傘の構造 (蛇の目傘)



「傘張り図」「職人尽絵」(全18図の内)より傘紙職人の親方(手前)と弟子(奥)江戸時代中期(岐阜市歴史博物館蔵)

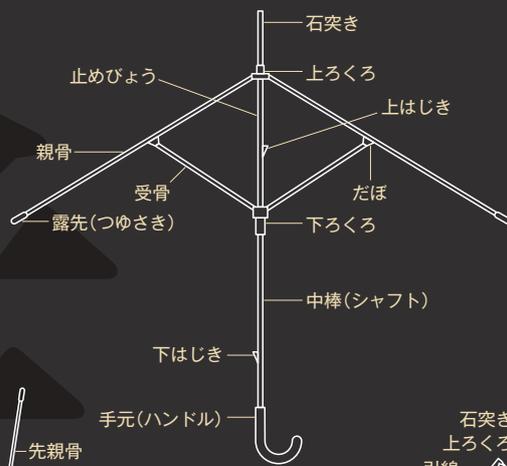
## 蛇の目傘 (岐阜和傘) の主な製造工程

いずれも「ぎふ歴史物語—伝統の技と美—」岐阜市歴史博物館総合展示案内(岐阜市歴史博物館 2006)を参考に編集部作成

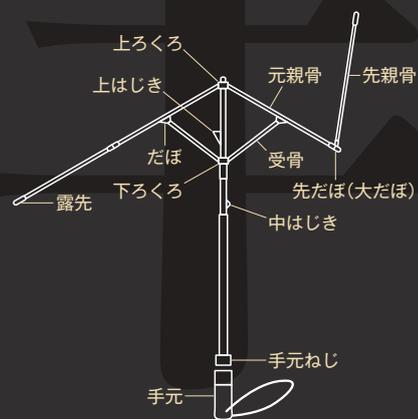


## 洋傘の構造 (長傘, 折り畳み傘)

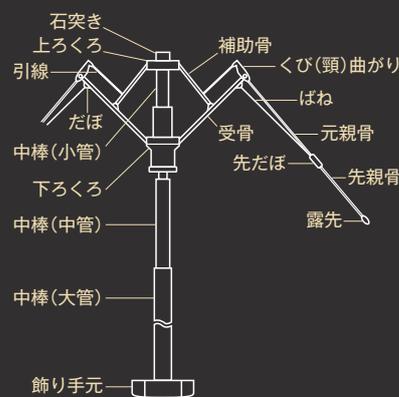
日本洋傘振興協議会のホームページ (<http://www.jupa.gr.jp/>) を参考に編集部作成



CMで有名だった折り畳み傘の当時の看板(水戸市立博物館所蔵)



折り畳み傘 (ホック式)



折り畳み傘 (トップレス式)

和傘(蛇の目傘)、洋傘(長傘、折り畳み傘)の構造と各部の名称を紹介する。また、和傘の工程は非常に複雑なので、岐阜和傘を例にして、主にどのような製造工程があるのかを見てみたい。

## 略年表参考文献

『企画展 加納の和傘』図録(岐阜市歴史博物館 1985)  
 『館藏品 和傘 資料選集』(岐阜市歴史博物館 2012)  
 『阿島傘』(喬木村教育委員会 2003)  
 『ぎふ歴史物語 伝統の技と美』岐阜市歴史博物館総合展示案内(岐阜市歴史博物館 2006)

『傘—和傘・パラソル・アンブレラ』(INAX 出版 1995)  
 『Front』1996年6月号(リバーフロント整備センター 1996)  
 『ふてはこ』15号(株式会社白鳳堂 2008)  
 『アンブレラ—傘の文化史』(八坂書房 2002)  
 『明治・大正・家庭史年表』(河出書房新社 2000)

『昭和・平成家庭史年表(増補版)』(河出書房新社 2001)  
 『近世風俗志(守貞読稿)(5)』(岩波書店 2002)

※洋傘にまつわる歴史については、日本洋傘振興協議会からの提供資料を編集部が一部抜粋して記載

# 雨を楽ししむ傘文化を提供したい

——福井洋傘の「まねされないものづくり」

かつて洋傘のメーカーがひしめいていた福井県。洋傘の生産拠点が海外へと移るなか、「日本から洋傘づくりがなくなってしまう」と廃業を踏み止まった企業がある。株式会社福井洋傘だ。採算を度外視して顧客のニーズにこたえるものづくりが評価され、今は高級洋傘メーカーとして名を馳せる。「五感で傘を楽しんでほしい」という橋本肇さんに話を聞いた。

ファッションアイテムとして愛用できる傘

1本の平均単価が3万7000円。消耗品ではなく、長く使いつづけたい愛用品として傘を楽しむ人たちに強く支持されている洋傘メーカーが福井市にある。代表取締役社長の橋本肇さんが「雨除けの道具は売らない。売るのは文化としての傘」と強調する株式会社福井洋傘だ。

伝統を現代に甦らせた、曹洞宗総本山永平寺ご用達の蛇の目洋傘、大島紬や友禅など希少な職人技と手を携えた最高級傘、華やかで繊細な浮き織や刺繍をあしらった雨傘、日傘。



## 橋本 肇さん

はしもとはじめ

株式会社 福井洋傘 代表取締役社長

音響工学を学び、地元・福井の放送局系列の会社に勤務したのち家業を継ぐ。ハイセンスな高級洋傘を製造・販売。売れ筋のオリジナル高級傘は1本3万円から5万円するが、全工程を手作業で丁寧に仕上げるものづくりが評価され、販路は順調に拡大している。



(独特な手元の説明をする橋本さん) ループ状になった革製の手元は手首に引っかけて使う。手に障がいがある人や筋力が衰えた人のことを考えて考案した



ロケットや旅客機の素材となる炭素繊維を用いた傘骨。軽いうえに抜群の強度を誇る。自社の専用工場で製造する

それはデザインにとどまらない。

強さと軽さを同時に実現するため、ふつうは傘骨にステンレスを使うところ、カーボンや炭素繊維を用いる。ジョイント部にチタンを使った傘もある。持ち手となる手元は、身体が不自由な人も使いやすい形状を工夫し、手首に通せば置き忘れ防止にもなる革製の輪が付く。

多様な形状の木製手元や石突き(洋傘の頭部)を小ロットでも製造可能な特許技術の3D切削加工マシンを保有し、ロケットや旅客機の素材となる炭素繊維まで自社製造する傘メーカーなど、国内はもちろんのこと、海外にもないかもしれない。

メンテナンスにも応じる「一生ものの傘」なので、服や靴と同じファッションアイテムと考えれば、傘1本に4〜5万円かけるのも特段に意外なことではないといえる。顧客の9割が女性で数本併用する人が多いという。優美なフォルムを支える精緻で頑丈な仕上がり。福井洋傘の製品を手にとると、たしかに豊かな文化を実感できる。

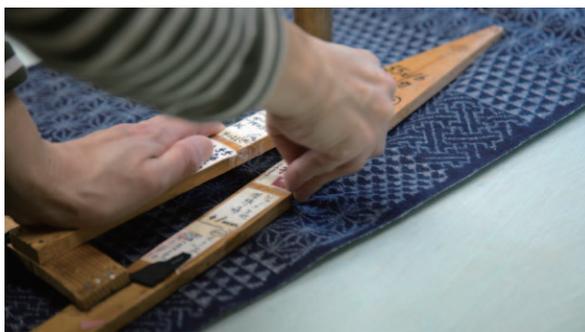
## 顧客の要望を取り入れた結果としての高い品質

福井洋傘の創業は1972年(昭和47)。県の農業委員を務めていた橋

本平吉会長が、農閑期の事業として大阪の洋傘メーカーを誘致し、その下請けから出発した。業績は順調に推移したが、やがて安価な品が市場を席巻し、洋傘業界の生産は海外へシフト。高品質の傘に特化していた同社は最後まで生き残ったものの、借金して工場を建てた直後に頼みの綱の取引先が海外生産に踏み切り、にっちもさっちもいなくなった。

音響工学を学び地元放送局系列の会社で働いていた橋本肇さんは1989年(平成元)、ある使命感を抱いて家業に戻る。「おやじは廃業するつもりでした。でもちよっと待て、と。ウチが消え

右：奄美大島の特産品「大島紬」を傘生地を用いた最高級品。光が射しこむことによって、さらに表情が豊かになる。大島紬以外の織物、染め物も扱っているのは、日本の文化を支える職人の技を次代につなぎたいの思いから



反物を傘の小間（こま）の形に合わせて「裁ち型（たちがた）」で裁断。裁ち型はすべて手づくりで、驚くほどたくさん種類があった



傘用のミシンで傘生地を縫う従業員たち。縫いのピッチや強度など技術と細かな調整が必要



若い従業員に上ろくろの縫い方を指導する橋本さんの母親（左）。橋本さんが「魔法の手」と呼ぶほどの技術が、仕事を通じて次の世代に受け継がれている



傘生地を指ではじき、張り具合を確認する橋本さん。雨が降ったときにきれいな音が出るかどうかは、傘生地とその張り具合で決まる

ると実質、日本から洋傘づくりがなくなる。とどめをさしたくはない。幸い先祖から頂いた土地と家、田畑も井戸水もある。最低限、生きてはいける。ここは背水の陣を敷こう、と」

選んだ道は、定評ある自社の高い技術力と、繊維や眼鏡フレームなど福井の地場産業の特長を活かし、愚直なまで国産にこだわる姿勢だ。橋本さんが言うところの「儲からないから誰もまねしないシステム」をめぐらし、効率と利益を求めて海外へ出る洋傘業界の趨勢の真逆を行った。だが、それは最初から受け入れられたわけではない。百貨店の特産品

フェアなどへ出品しても「縫製が違おうというけれど、他の安い傘でもべつに雨漏りしないでしょ。なんで高いの？」と質（た）され言葉に窮した。

そこで「どんな傘なら買って頂けるのですか？」と顧客に聞くことから仕切り直した。これが今の福井洋傘の原点だ。「もっと強く、軽く、使いやすいと、といったお客さまの要望を反映していくうち、結果的に材質や手間がどんどん高度化していき、おのずと当初の平均単価1万円レベルを超えていました」と橋本さん。採算を度外視してまで要望にこたえる徹底した顧客志向が、傘に文化を求める潜在需要を掘り起こした。

### 高級車にふさわしい傘、鼓のような雨音を楽しむ傘

内装の本革シートが水気を嫌う高級車のアクセサリ群に採用された傘「ヌレンザ」も顧客志向の産物だ。

2004年に福井商工会議所が消費者の要望を起点に地場産業を振興しようとして「苦情・クレーム博覧会」を開催。そこに寄せられた「電車内で傘の水滴に濡れるのがイヤ」との声にこたえた。生地に塗布する撥水剤の開発には巨額の投資が必要とわかり、撥水性のある生地を地元の繊維メーカーと開発することにした。

だが、布地の撥水性と耐水圧（水の染み込みを防ぐ能力）を両方高めるのは、技術的に難しい。1年ほど試行錯誤を繰り返して、極細の糸で織った超高密度のポリエステル生地を使うことで克服。それを使って実現したのがヌレンザ（福井弁で「濡れないよ」の意味）なのだ。

福井洋傘の製品には、音響のプロだった橋本さんならではのこだわりも活かされている。それは、雨音を楽しめる傘。鼓の響きのようなポン、ポンという音色が耳に心地よい。「スピーカーと同じで、生地が張っていて構造にひずみがなければ、確実にその傘はきれいな音を出します。

左ページ:水を受ける「蛇の目洋傘」。傘の下にいると、鼓のような快い音が聞こえた

張りすぎてもたるみすぎてもダメ。  
針の塩梅あじばい一つで音の高低が変わりま  
す」

水琴窟に代表されるように、水音  
は人に安らぎをもたらす。たまには  
リズムカルな雨音に耳を傾けてみる  
のもいい。さらに、傘を使うときに  
は音だけでなく、五感を総動員して  
味わってほしいと橋本さんは願う。

「傘を持ったときの手元の触感、光  
が射したときに変わる生地の色彩、  
そして雨の匂い。音を含めてこうい  
うものがすべてそろったとき『雨っ  
て楽しい』と思ってもらえるはずで  
すから」

## 日本で熟成した傘文化を 伝道し世界に発信したい

4年前から、百貨店のバイヤーと  
顧客の投票による審査で傘デザイン  
コンテストを実施している。デザイ  
ン科の学生など応募者は毎年500  
人近い。受賞作品は1年間かけて製  
品化。「実現が難しいものほど受賞す  
るので原価割れして、つくればつく  
るほど赤字に」と橋本さんは苦笑す  
るが、これもまた間接的に顧客の要  
望にこたえる挑戦にほかならない。  
コンテストで福井洋傘を知り入社し

た若者も。「儲からない傘づくり」は  
人材という宝物を呼び寄せている。

露払いと厄払いで物事が丸くおさ  
まる縁起物ゆえ、かつて嫁入り道具  
としての「傘渡し」の儀式が日本各  
地にあった（詳細はp.29）。傘文化の伝  
道者を自任する橋本さんは、傘にま  
つわるこうした逸話を機会あること  
に披露しており、文化としての傘を  
売る理念は若手社員にも引き継がれ  
ている。

蛇の目洋傘は外国人にも人気が高  
い。「西洋の傘は日本で磨かれ、これ  
だけ熟成したんですよ、と世界に知  
らしめたい」と橋本さんは輸出にも  
意欲を燃やす。福井県から石川県に  
かけ全盛期には約860社の傘関連  
会社があったが、今は福井洋傘1社  
だけとなった。古来の織物や工芸品  
を見ても、いったん途絶えてしまっ  
たら元に戻すのはきわめて難しい。  
しかし、たとえ単独でも踏み止まっ  
ていれば、いつか盛り返すこともで  
きる。

「途方もない夢ですが」と前置きし  
つつ「傘をつくりたいと思う外国人  
が『日本で修行してきた』と自慢で  
きる〈傘村〉をここに築きたい」と  
橋本さんは力を込めた。

(2015年5月2日取材)



# 江戸時代から続く 岐阜・加納の 和傘づくり

江戸時代から突出した和傘の生産地として知られる岐阜市加納地区。和傘の複雑な工程を分業化した生産モデルと長良川の舟運によって発展したが、今ではたった3軒に。多角化による経営努力と市民講座などで伝統継承に励む株式会社マルト藤沢商店の藤沢健一さんと、サポートする岐阜市歴史博物館の大塚清史さんを訪ねた。

分業システムと長良川の舟運で栄えた岐阜和傘

傘骨にする真竹割りから、油を引き天日で干す仕上げまで。細分化すれば100工程に及ぶ和傘は、つくものにもっとも手間のかかる伝統工芸品の一つだ。江戸時代から和傘づくりが盛んで、今も芸能や舞踊などで使われる和傘のほぼ9割を生産しているといわれるのが、岐阜市加納地区。多岐にわたる工程を職人が分業し、間屋が全体を差配する大量生産システムを築いたことで岐阜は和傘の一大産地となった。最盛期の昭和20年代半ばには年産1000万本を超えている。

1756年（宝暦6）、加納藩主・

永井直陳は下級武士の生計を助けるため和傘づくりを奨励した。分業体制の確立に加え、美濃和紙の産地に近く、周辺の山間地で良質の竹が採取できるなど、原材料に恵まれたことも加納の和傘が栄えた理由だ。

原材料と製品の搬送経路として「長良川の舟運が大きな役割を果たした」と教えてくれるのは、岐阜市歴史博物館学芸員の大塚清史さん。

「長良川から伊勢湾の桑名に出て、廻船によって江戸・大坂などの大消



費地へ輸送したので、広範囲に和傘を販売することができたわけです」

岐阜市の加納城跡は公園になっており、西側は「加納長刀堀」（写真2）という。なるほど細い道を見通すと

長刀のような形に湾曲している。このあたりはかつて加納城の「長刀堀」だった。通りの西側、少し高台

になっている民家の石垣に、往時の武家屋敷の名残をかすかに見てとれ

国土地理院基盤地図情報「岐阜県、愛知県」及び、国土交通省国土数値情報「河川データ（平成20年）、鉄道データ（平成25年）」より編集部で作図。この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の基盤地図情報を使用した。（承認番号 平27情使、第203号）

長良川と合流する荒田川（写真1）。かつて岐阜の和傘は加納地区でつくられ、長刀堀（写真2、3）から荒田川、さらに長良川を経て江戸や大坂に運ばれた



## 藤沢 健一 さん ふじさわ けんいち

株式会社 マルト藤沢商店  
代表取締役  
岐阜市和傘振興会 会長

慶應義塾大学卒業後、家業である藤沢商店を継ぐ。創業84年の和傘製造卸企業の代表として経営の多角化などに努め、岐阜和傘を伝え広める活動を続けている。



## 大塚 清史 さん おおつか きよし

岐阜市歴史博物館  
学芸員

東京都出身。1991年（平成3）から岐阜市歴史博物館に勤務。前館長・藪下浩さんから岐阜和傘の研究を継ぐ。2012年（平成24）には同館発行の『館蔵品図録 和傘 資料選集』の執筆・編集を務めた。



る。さらに南へ下れば、住宅街の間を「長刀堀排水路」（写真3）が貫通し、荒田川と合流して長良川本流へ。長い時を経て埋め立てられ、流路も変わったものの、産業としての和傘の発展と「堀」や「川」との密接な関係は、現在のまちなみと地形からも偲ぶことができる。

### 職人芸を競う細物の蛇の目や日傘に特長

精緻な技を凝らした岐阜和傘が岐阜市歴史博物館に展示されている。例えば「松葉骨」という意匠。傘紙の土台となる親骨が周縁部に向かって二股に分かれ、まるで松葉のよう。

大坂や和歌山では、主に無骨で頑丈な「太物」の番傘がつくられていたが、職人芸を競った岐阜和傘は、豊むと細く収まる「細物」の蛇の目傘（注）、日傘、舞踊傘を得意とした。

蛇の目傘は、番傘に比べて1本ずつの骨が細い。色とりどりの傘紙や羽二重（絹と和紙を貼り合わせた傘紙）を張り、親骨を支える小骨には飾り糸を付ける。傘を彩る模様も紙を貼りつけるのではなく、平紙をあらかじめ模様に合わせて切り抜いたり、異なる色柄の傘紙を切りつないで模様

をつくる「切継ぎ」という独自の手法を編み出した。これによって内側から模様が透けて見える。技術と手間を要する高級品だ。

日用品としての番傘は、高度経済成長期以降、たちまち洋傘に取って代わられた。かろうじて岐阜和傘が残るのは、高度な技術で多品種を生産でき、歌舞伎や祭礼などで使う特殊な和傘の需要にこたえているからにはかならない。

「伊勢神宮の式年遷宮で使われる大ぶりの差し掛け傘などを見るとよくわかるのですが、傘骨のソリや間隔に細心の注意が払われていないと丈夫でないし美しくありません。均等に配置された竹の骨は優美です。どうしても私たちは、傘紙の色や模様で（きれい）と感じてしまうのですが、道具としての本来の美しさは構造にあります」と、大塚さんは岐阜和傘の工芸的な真価を強調した。

### 伝統を絶やさないため 経営を多角化

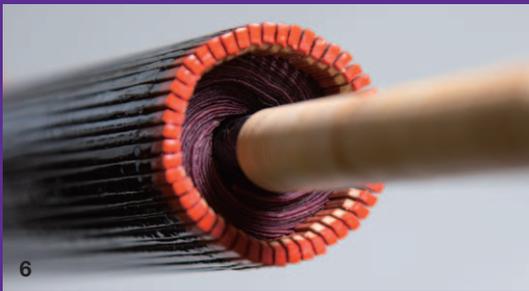
いまや岐阜和傘を製造販売するのは加納地区に3軒のみ。その1軒、株式会社マルト藤沢商店は1931年（昭和6）に和傘問屋として創業し

（注）

和傘（蛇の目傘）の構造についてはp11を参照。



5



6



7

4 おもて面と裏面で別々の紙を使う「袋張り」の日傘。日光の暑さを遮断するために空気の層をつくっている。写真は全開ではなく一段落としてすぼめた状態

5 桜色に白い水玉模様が入った和傘。晴雨兼用の両天傘(りょうてんがさ)と推察される。飾り糸のかがり方に特徴があるうえ、畳むと非常に細身になることから極上品と思われる

6 岐阜・加納の傘は畳んだときに細身になる「細物」を得意とした。畳んだときの姿も美しいようにつくっていた

7 小骨(しょうぼね)を二つ割りにした「小骨松葉」の蛇の目傘。これは昭和時代(戦前)につくられたもの。今、この技法を使える職人はいない

(和傘の撮影協力: 岐阜市歴史博物館)

岐阜市歴史博物館の2階にある和傘コーナー。色とりどりの岐阜の和傘が常設展示されている



4

た。同年生まれの藤沢健一社長が大学を卒業して家業に入った1954年(昭和29)、すでに和傘の需要は下り坂だったが、それでも「見本を持って東北に販売ルートを開拓すると、大卒初任給1万円の20倍は稼げました」と当時を振り返る。

しかし洋傘の普及にシェアを奪われ、雪崩を打つように右肩下がりとなり、最盛期には加納地区に500軒以上あった傘屋が5分の1以下に減った。1970年(昭和45)に始まった国鉄(当時)の「デイスカパー・ジャパン」キャンペーンで和傘も多少は見直されたが、需要の減少に歯止めはかからない。70年代半ばに和傘職人を元気づけようと発案した品評会を藤沢さんは思い出す。

「料亭に職人を招待し、同じ材料で競作した傘を、京都のお得意さまに審査して頂きました。ところが、すべてあまりにもきれいでできていたので甲乙つけられなかったのです」

品評会用に競作した、絹と和紙を貼り合わせた真紅の羽二重傘は、今も自宅に保管してあるという。

職人の丹精込めた和傘づくりの伝統を絶やさないためには、新たな収益の柱を築かなければならない。藤沢さんは和傘の技術を使い経営の多

角化に乗り出した。和傘でつくったクリスマスツリーなどを東京の表参道で販売してもらおうと米国人に大ヒット。返還前の沖縄でも駐留兵の家族に好まれ、アメリカ本国へと輸出された。その余勢を駆り、オルゴールがクリスマスソングを奏でるオーナメントが売れ筋商品となった。

「急激な円高に振れた1985年(昭和60)ごろまでは、オリジナル・デザインの雑貨商品だけで年間5000万円の売上でした」と藤沢さんは回想する。

### ミニ和傘と中国生産、そして職人の育成まで

為替差損と新興国の台頭で輸出商品に見切りをつけてからは、本業の和傘を軸にした新規事業へ舵を切る。社内ではミニチュア和傘を製作。

藤沢さん自ら六十数点を一挙にデザインした。当初は土産物問屋を通じて全国の観光地で販売していたが、2年ほどで販売ルートとデザインを変更して京都のまちなかや空港などで売ると、外国への土産物として人気を呼んだ。

よさこいなど全国各地の祭礼舞踊の練習用に使う消耗品の和傘は常に



12



13



14

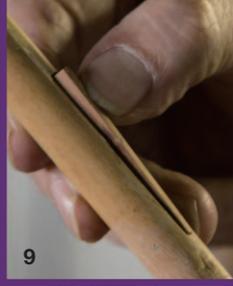
8・9 傘が開いた状態を保つ「ハジキ」の製作を実演する藤沢さん8とハジキの拡大写真9。蛇の目傘など高級な和傘のハジキは木製で、材はツゲが使われることが多い。外見からはわかりにくい、金属やバネは一切使わず、竹の柄のなかに木製の部品を組み合わせて取り付けられているだけ。仮に1mmでもずれたら用をなさないといい繊細な技術である

10 藤沢さん自らデザインしたミニチュアの和傘。土産物として重宝されている

11 オルゴールがクリスマスソングを奏でる「糸巻きボールキット」。海外で好評だったクリスマスオーナメントの1つ

12 野菜倉庫を買って取って改造した作業場。材料となる真竹は寸法が長く、また和傘は工程が多いため、どうしても広い面積が必要になる

13・14 作業場は工程によって小部屋に分かれている。13は傘骨づくり、14では傘紙の準備が進められている



9



8



11



10

一定の数量を見込めるが、単価が安く国内ではコストが見合わず人手も足りなくなっていた。

そこで、岐阜市と中国浙江省杭州市が友好都市提携を結んだのを機に、工芸品の輸出公司を窓口とし中国生産に踏み切った。最初の2年間は年に4回ほど藤沢さん自ら現地へ赴き指導した。それが1980年代末のことで、今も年間1万本以上、製造を委託している。

「数量を重ね経験を積んだ今では、国産に勝るとも劣らない品物ができています。骨組みに塗る漆ひとつとっても、驚くほどきれいに仕上がっていますよ」

かつて和傘づくりの後継者育成は、分業に携わる各工房に任せられていた。それができなくなり、2000年(平成12)にマルチ藤沢商店が問屋として社員職人を募集し、育成に乗り出した。36名の応募者から5名を採用。藤沢さんによれば「ほんのわずかの一工程でも完璧にできるまでに3年はかかる」というが、これで「骨削り」や「紙張り」、手元ろくろ(小骨に柄竹をつなぐ部品)とハジキ(傘が開いた状態を保つ部品)を取り付ける「繰り込み」などの基本工程を内製できる体制が整った。

## 和傘文化の灯火を未来へ渡すために

岐阜市歴史博物館では、マルチ藤沢商店などの職人が指導する「岐阜和傘を作る」講座を年1回、開催している。10名ずつ2グループに分かれ、骨組みした傘に和紙を張り、糸かがりをする作業を4日間にわたって体験する。今年で24回目を数え、一度も定員割れしたことがない。子ども向けの講座も開催している。

一般市民が和傘の美しさを知り、広めてもらう意図で始めた講座だが、最近では他の産地からの参加者もあり、和傘技術入門講座の趣も呈している。こうした地道な試みが、やがては後継者を生むのかもしれない。

東京・銀座の文具店の吹き抜けて蛇の目傘を吊るすディスプレイが好評だったことがある。「和傘を目にする機会を増やしたい」と藤沢さんは望む。「銀座の歩行者天国で和傘をさした集団が練り歩く、なんていうイベントをやってみたいですね」

歌舞伎で使う和傘は国内でしかつくれない。消え失せてから気づくのでは遅いのだ。和傘文化の灯火が明るいうちに未来へ受け渡したい。

(2015年5月3〜4日取材)

## 傘人2 雨に寄り添う傘

# ファッショントしての傘

## ——イギリスとの対比から考える魅力とは？

ロンドンには霧や雨のイメージが強いけれど、イギリスの人たちはあまり傘をささないといわれる。男性の傘はステータスシンボルであり、女性の傘はファッションの側面が強い。日本とイギリスの対比から垣間見える傘の魅力について、服飾史家の中野香織さんに語っていただいた。

### ステータスシンボルだった英国紳士の愛用傘

私の知る限り、傘の歴史を体系的にまとめた文献はごくわずかしかありません。特に雨傘が大衆化してからは、傘を「道具」と「ファッション」、どちらで捉えるべきか難しい選択です。いずれにせよ西洋人、特にイギリス人にとって、雨露をしのぐ方法は帽子やコートが一般的です。雨傘もあるにはあるのですが、ほど激しい雨のときしか傘を開かないようです。

どんなファッション史にもレジェンドと呼ばれる人物がいるものです。イギリスの雨傘でその役割を担ったのがジョナス・ハンウェイでした。

イギリスで雨傘が使われるようになったのは18世紀。旅行家だったハンウェイは外国から、担ぐようにして持ち歩かなければいけないほどの、大きな雨傘を持ち帰りました。

当時の傘といえば、主に女性を使うパラソル（日傘）が主流でした。男性が傘をさすこと自体が珍しく、大きな傘をさしてまちを歩くハンウェイを見て、おしゃれなアイテムとは思われなかったようです。後に現在のようなコンパクトな形に近いものが開発され、雨傘は次第に認知されるようになりました。

一方、細く巻き上げた傘は一種のステータスシンボルとしても見なされるようになりました。当時の英国紳士の肖像画を見ると、17世紀以降、

彼らが手に持つのはサーベルから馬鞭、ステッキ、そして雨傘へと移り変わっていきます。雨傘は畳んでしまえば細いステッキ状になり、あるときは武器にもなり得る。そうしたものを持っていることが英国紳士のステータスになったわけです。

こうしてイギリスに高級傘メーカーが創業していきます。1868年（慶応4・明治元）に創業したフォックス社（フォックスアンブレラズ）もその1つです。フォックス社の傘は畳んだときに美しくなるようにつくられています。イギリスでは50ペンスほどで傘をきれいに畳むことを商売にしている人がいるほど、雨傘をいかに細く巻き上げるかに価値があります。もう1つ、イギリスの高級傘メー



**中野 香織** さん  
なかの かおり

服飾史家／明治大学国際日本学部特任教授

1962年（昭和37）生まれ。ファッション史から最新モードまで、幅広い視野から研究・執筆・レクチャーを行なう。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。英国ケンブリッジ大学客員研究員などを経て文筆業に。2008年（平成20）、明治大学国際日本学部特任教授に就任。『モードとエロスと資本』（集英社2010）、『ダンディズムの系譜——男が憧れた男たち』（新潮選書2009）、『愛されるモード』（中央公論新社2009）など著書多数。

（注）ブリッグ社

英国傘メーカー「ブリッグ」は鞆メーカーと合併して「スウェイン・アドニー・ブリッグ」となっている

英国の高級ビニール傘「バードケージ」を  
使われるエリザベス女王  
写真：Press Association/アフロ

カーとして有名なのが、1836年（天保7）創業のブリック社（注）です。傘の先端まで1本の木材でつくられた美しいハンドル（手元）が特徴で、そのハンドルにはお酒を入れるフラスコが仕込まれているものもあつたそうです。そんな遊び心が英国紳士らしいですね。

## 英国女王の ビニール傘コーデイナー

では、英国淑女にとっての雨傘はどうでしょうか。つとに有名なのは、英国女王も使われているフルトン社の高級ビニール傘「バードケージ」です。鳥かごという意味のとおり、深いアーチ型のデザインが特徴です。

英国女王であるエリザベス2世は「ワンスタイル&マルチシェード」というスタイルを貫いています。基本的なシルエツトや組み合わせはほぼ一定だけれど、テーマカラーだけは常に異なるというスタイルです。例えば、黄色でコーデイナーにするなら、ハンドルやオーナメント（裝飾）が黄色のバードケージを選ぶわけです。大衆にご自分の姿を見せるためのビニール傘であり、コーデイナーの色の数だけ雨傘をおもちな

のですね。

このように英国紳士&淑女の雨傘は「ファッション」の側面が強いですが、雨傘はトータルコーデイナーで見られることが多いと思います。高級スーツに身を包み、高価な靴を履いていても、安価なビニール傘を持つていたらアンバランスですよね。傘1本に愛着をもつ生活はなかなか楽しいと思います。なにより、一度よい雨傘を知ってしまうと安い傘に戻れなくなります。ハンドルが木でできている高級傘ならば、ハンドルの経年変化を楽しむという価値さえ含まれています。1本数万円するフォックス社やブリック社の高級傘、もしくはコーデイナーのたびに変わるバードケージなどは安価なビニール傘と趣向の異なるものです。

ただし、英国紳士的な価値観に沿っていえば、傘は贅沢品の要素をもっているとはいえず、あまりにも執着しすぎるのは恥ずかしいことです。雨傘はなくしたり盗まれたりするところが多いとはいえず、肌身離さず持ち歩くわけにもいきません。そのうえ、靴や靴や帽子を他人とシェアすることはありませんが、傘は他人との間で貸し借りすることが多々あります。つまり、雨傘はファッション的な要

素をもちながらも、取り替え可能な道具としての要素が強いのだと思います。

## 傘を魅力的にする 雨音と相合い傘

では文化的な意味合いで、日本における傘の魅力を高めていくには、どうすればいいのでしょうか。

私なりに考えた答えが、日本特有の「情緒」です。

イギリスでは、パラソルは淑女の贅沢品として発達してきましたが、ロマンティックな小道具としても使われています。例えば、ちよつと気になる紳士がいたとします。しかし、その人をまじまじと見るのは、英国淑女にとって恥ずべきこと。なので、パラソルをさしながらちらつとその男性を見て、目が合ったらさつとパラソルで顔を隠す——。一種の「フラーティング」と呼ばれるものですね。恋の駆け引きとまではいかない、軽い戯れのことです。

私はこうした、どこか情緒的ともいえる要素が、傘の魅力をより一層引き立てるのではないかと思います。さいわい、日本では雨や傘に関する表現がとて豊富ですね。例えば



「相合い傘 市村亀蔵・中邑喜代三」

男女の相合い傘を描く場合、傘の柄を男性は右手で握り、女性は左手を添えるのが一般的。2人同時に柄を持つのが相合い傘、1人だけ持つと差しかけになってしまう石川豊信 画 / 18世紀中ごろ（岐阜市歴史博物館蔵）

「相合い傘」。イギリスは階級社会の価値観が色濃く残っていますので、紳士が淑女に傘をさしかけることはあまりありません。傘をさしかけるのは執事の役目です。相合い傘というハッピーな表現は、縦書き文字をもつ日本特有の文化なんですよ。質のいい雨傘は、雨をはじく音さえも心地よいものです。相合い傘の下は自然と特別な空間になるので、心地よい雨音を聞きながら気のある者同士が会話をすれば、2人の距離はグツと縮まるに違いありません。

これはおそらく、日本人にしかできないフラーティングです。日本の男性は、すぐにでも高級な雨傘を手に入れて、ぜひお試しくださいね。（2015年4月21日取材）



# 魅惑のフォルムをつくりだす アートと日本の技術力

従来の傘ではあり得ないフォルムの傘を世に送り出すカナダ人がいる。ジョン・ディチェザレさんだ。デザインの特徴は「左右非対称」と「立体感」。日本のメーカーに製品化を頼んでも「このデザインでは無理!」と断られつづけたが、高い技術をもつ京都の洋傘職人と出会って道が開けた。外国人から日本の傘はどう見られているのか、そもそもなぜ傘を日本でつくろうと思ったのか?

## ジョン・ディチェザレさん

ディチェザレ デザイン株式会社 代表取締役  
デザイナー

カナダの美術大学で彫刻を学び、ブロンズ像の工房で働いた後、2000年(平成12)に来日。2004年(平成16)にディチェザレ デザイン株式会社を設立。「パラシェル」「パンプキン」「サクラ」など個性的なフォルムの傘を生み出している。手にするのは「パンプキン」シリーズの男性用雨傘「グランデ」。

## 欧米のアートシーンで 傘は重要なモチーフ

貝殻のような形をした非対称なデザインが目を惹く「パラシエル」。

傘ではないような立体的なフォルムの「パンピキン」。大胆な切れ込みをもつ桜の花びらに似た「サクラ」……。カナダ人のジョン・ディチェ

ザレさんが生み出すこれらの雨傘・日傘は、1本1万円前後から、デザインや素材によっては10万円近いものもある。決して安くはないが、百貨店や専門店で支持を集めている。

私たちが思い描く傘のフォルムとは一線を画すこれらのデザインすべて、ディチェザレさんが考えたものだ。カナダの美術大学で彫刻を学び、大学卒業後にブロンズ像の工房で働

いたあと、2000年(平成12)に来日する。日本に来た動機はいくつかあるが、そもそも日本文化に興味があったことが大きい。

「子どものころ、カナダでも『宇宙戦艦ヤマト』が放映されていました。小学校が終わるとヤマト見たさに走って家に帰るくらい大ファンでした」

長じて進学した美術大学では、日本の歴史や芸術を学ぶことになる。

「日本のアートは深いです。大学では葛飾北斎についての講義もあります。私は彫刻家をめざしていたので、ブロンズと通じるものがある日本の仏像も大好きでした」

ディチェザレさんの彫刻のモチーフの1つが傘だった。幼いころ、祖母が美しい傘を1本もっていたこと、

そして、ものづくりに興味を抱く少年時代に傘の骨の構造を飽きることなく眺めていたこと。そんな記憶とともに、傘は文化的に興味あるものだという分析もしていた。

「ピエール・オーギュスト・ルノワールは『雨傘』を描いていますし、映画『雨に唄えば』ではジーン・ケリーの傘を使ったダンスシーンがありますね。これらはほんの一例で、欧米では昔から傘はアートの大事なモチーフだったのです」

美大生として創作活動に没頭するうちに「貝殻の形をした日傘」のアイデアが浮かぶ。「開いた傘を上から見るとどれも丸くて均一的なのでつまらない」という発想から生まれるもので、のちの「パラシエル」につながるのだが、それは少し先の話。このときはあくまでも彫刻のためのデッサンに過ぎなかった。

## 日本で目の当たりにした たくさんカラフルな傘

ブロンズ像の生産プロセスを学んだディチェザレさんは工房を辞めたのち、京都に住む友人のカナダ人写真家を頼って日本に来た。

来日当初は「日本の文化を見たく

てうろろしていた」と笑うディチェザレさんは、カナダでは見たことがない光景を目の当たりにする。

「日本映画で日本人が傘をさすシーンを見ましたが、日本に来たらほんとうにたくさんの人たちが色とりどりの傘をさして歩いている。『わあ、すごい!』と感激しましたね」

カナダの年間降水量は決して少ないが、日本人ほど雨傘をささない。国土は日本の約27倍なのに、人口は約3分の1(約3500万人)のカナダはクルマ社会だからだ。

「傘をさして歩く習慣がありません。梅雨もないし、雨より雪がすごいで、傘を使う機会が少ないのです」

傘の専門店が片手で足りるほどだし、売っているのは黒や紺色の地味な傘ばかり。折り畳み傘もあるにはあるが、種類はきわめて少ない。

「日本の傘はいろいろな形がありまですし、素材、デザイン、手元も豊富です。要因の1つに日本の都市部では『歩くこと』が多いからだと思う。日本の豊かな傘文化は、歩くことを想定したアーバンプランニングと関係が深いのではないのでしょうか」

たしかに日本人は昔から歩いてどこにでも行った。江戸時代は、巡礼修行以外の旅は禁じられていたので、



【雨傘】  
印象派の巨匠・ルノワールが4年もの歳月をかけて描いた大作。雨傘が一般的に出回りはじめたころに描いたといわれている。ピエール＝オーギュスト・ルノワール(1841-1919/フランス) 提供: Bridgeman Images/アフロ

寺社詣でや霊山信仰を理由に多くの人たちが笠や傘を手旅に旅していた。「日本は電車がたくさん走っていて、どこに行くにもスムーズですね。それに都会の喧噪のなかでは、傘をさすことで自分だけのスペースが生まれます。傘にはそういう価値もあるんですよ」

## 1年間でたったの6本!?! 「パラシエル」の苦しい船出

日本に来て傘の多さ、多彩さに驚いたディエザレさん。自身のアイデア「パラシエル」を商品化しようと考えたのは自然な成り行きといえる。しかし、事はそう簡単ではなかった。

まずはプロトタイプ（試作品）をつくってもらおうと傘メーカーに掛け合ったものの「このデザインはつくれない」と断られてしまう。「ダメ、ダメ、ダメの連続でした。日本の傘メーカーのほとんどに断られましたから」と苦笑する。日本なら自分のデザインした、普通じゃない傘をつくってもらえるに違いないと思っていたので落胆も大きかった。

しかし、あるメーカーの仲立ちで頼もしいパートナーに巡り合う。そ

れが今も同社の傘づくりを支える京都の洋傘職人、東田稔さんと河野敏正さん。ともに50年以上のキャリアを誇るベテランだ。

パラシエルの商品化が難しかった理由は非対称な形にあった。傘には「小間」と呼ばれる部位がある。分割された状態の、三角形の生地のことだが、普通の傘なら小間の形や大きさはどれも同じなので、基本的には均一の縫い方でよい。しかし非対称なパラシエルは小間の形がそれぞれ異なるため、縫い方を変えなくてはいけない。熟練の技があつてこそ初めて商品になる。したがって限定生産にならざるを得なかった。

「スタートした年、パラシエルは6本しかつくれませんでした。だから初年度の販売本数はたった6本です。この先やっていけるかどうかもわからなかったですね」

笑いながら話すが、当時は笑い事ではなかったはずだ。ただし、プロシエルの工房で生産モデルを学ぶことが活きた。パラシエル以外にもプロトタイプをつくり、反応がよければ本数限定で売り場に置いてもらい広げていく、という青写真は描いていた。そこで他のメーカーの仕事で忙しい東田さんと河野さんに頼み



貝殻をモチーフとした斬新なフォルムの日傘「パラシエル」。さし方のポイントは、中棒を肩に乗せ、手元を握ること。帽子をかぶるような感覚で使う。上の写真3点は、畳み方を説明するディエザレさん

込んで「パンプキン」と「サクラ」の試作品および生産モデルをつくってもらい、売り込みに歩く。

幸い売り場での反応は上々だった。「初めてパラシエルを見たお客さまはショックを受けるようです。『どうやって開くの?』とか『これ傘なの?』と笑われましたが、そういう反応がバイヤーさんに喜ばれました」

パラシエル、パンプキン、サクラの生産・販売に目途が立ち、ディチエザレさんは法人化する。来日して5年目の2004年(平成16)だった。

## 伝統と技術を併せもつ 日本の傘は文化そのもの

今、ディチエザレさんには気がかりなことがある。来日したときに比べて、日本全体がファストファッション化していることだ。

「来日したところ、例えば洋服でもミドルレンジのブランドが今よりたくさんありました。どんどん失われていくのがとても残念です」

嘆いているのは傘だけではない。外国から見ると一種独特な日本のものづくり。それが消えてしまうのではないかと心配しているのだ。

「日本のデザイン、アート、そしてエンジニアリング。いずれも感性に富んでいて実に繊細です。傘も同様に、アイテム数や色、柄、骨構造などの多彩さは圧倒的です」

日本の傘メーカーで輸出に力を入れている会社はほとんどないが、ディチエザレさんの目には、海外の傘メーカーの多くが骨構造や製法で日本の傘を「手本」にしていると映る。

「ヨーロッパと日本では雨の質が違います。イギリスは霧のような細かい雨。日本はかなりの量の雨が、しかも長時間降りつづきます。ですから、ヨーロッパの傘をそのまま日本で使おうとすると、ステッチなどが耐えられず雨漏りしてしまう。特に梅雨には弱いようです」

日本人が暮らしのために導入した洋傘が、逆に欧米から注目されているとは……。青梅和傘の職人に和傘のろくろをもらったディチエザレさんは、自分でもろくろをつくらうとしたが、ついに再現できなかった。「あれこそ日本の文化です。ものすごい技術力ですね。和傘という伝統があり、海外にまねされる洋傘の技術もある。日本の傘はやはり文化なのです」

ただし、職人が減っている現状も

桜の花をイメージさせる日傘「サクラ」



ある。

「自分のスタイルに合った、質のよい素敵な傘をもつことです。そうすれば、それをつくっている職人さんたちを支えられるはずですよ」

傘は自分らしさを演出するファッション、あるいはアクセサリーだと考えているディチエザレさん。洋服のように傘も着替えれば、今よりきつと雨の日が楽しくなる。

(2015年4月29日取材)



1～3はディチエザレさんが生み出した「パンプキン」シリーズ。コロンとした丸みのあるフォルムが特徴的だ。  
1・2 女性用雨傘「リズム」 3 コンパクトサイズの日傘「カボチャ」

## 傘人3 雨に寄り添う傘

# どこいまでも理想の傘を追い求めて

都内に1万本もの傘を展示する専門店がある。その運営元である洋傘メーカーを立ち上げた林秀信さんは、番傘職人の仕事を飽くことなく見つめた子ども時代の夢をかなえようと、不惑を迎えてから傘業界に飛び込んだ。「丈夫な傘をつくってほしい」と富山県で言われ「ご当地傘」の開発にも取り組む。もっと楽しく、もっと便利に、もっと多くの人に——そんな思いで今日も傘をつくりつづけている。

## 世間を驚かせた500円の折り畳み傘

2014年(平成26)春、東京・自由が丘に世界でも珍しい傘の大型専門店「Cool Magic SHU'S (クール・マジック・シューズ)」がオープンした。ガラス張りの4階建てのビルは、全体が巨大なショーケースのようなくくりで、およそ1万本もの傘が所狭しとディスプレイされている。取材した日、外は日差しがまぶしいほどの晴天だったが、店内に客が途切れることはなく、思い思いにお気に入りの傘を選んでいった。

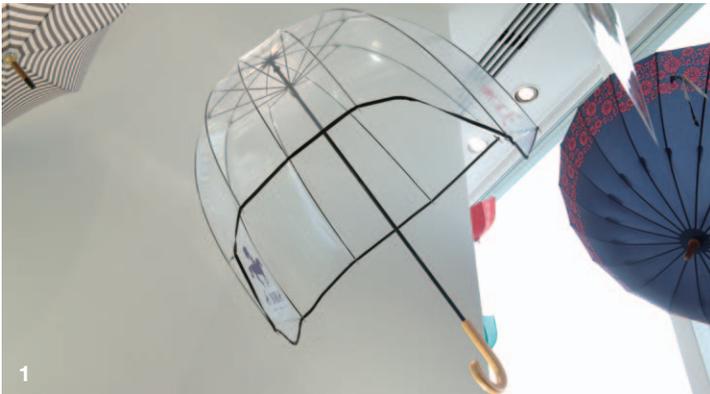
このショップを運営するのは、洋

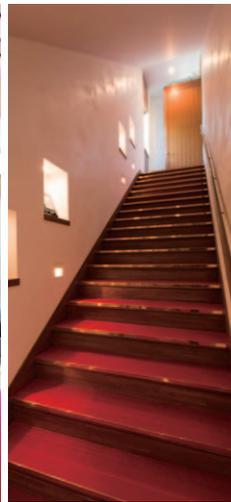
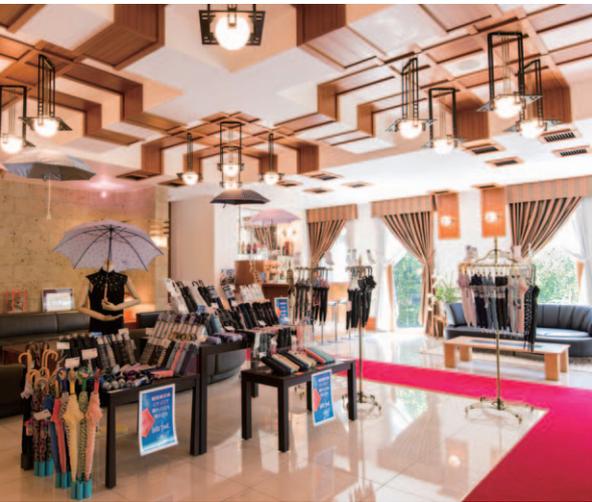
傘メーカーの株式会社シューズセレクション。社名の「シューズ」は靴ではなく、創業社長・林秀信さんの「秀」の字を音読みしたものだ。

「Water front(ウォーターフロント)」という同社のブランドが広く世間に知られるようになったのは、2000年(平成12)に発売を開始した「スーパーバリエー500」シリーズがきっかけだった。定価500円のコンパクトでカラフルな折り畳み傘は、ハイブランドの高級傘と使い捨てのビニール傘に二極化していた傘市場に新風を吹き込んだ。以来、「良い商品を低価格で」を信条に、さまざまな機能、デザインの傘を開発し、現

**林 秀信** さん  
はやし ひでのぶ  
株式会社シューズセレクション  
代表取締役社長

1946年(昭和21)長崎県生まれ。上京後、飲食店経営などを経て、洋傘の研究開発に取り組む。1986年(昭和61)に株式会社シューズセレクションを設立。名刺に「年中無休」と記載しているくらい、常に傘の新しいアイデアを考えている。





東急東横線・目黒線「田園調布駅」のそばにある迎賓館「御秀(ぎょしゅう)」。1棟丸ごと、傘のためだけの「家」だ。1Fのゲストハウスから赤いカーペット敷きの階段を地下へ降りるとショールームになっている。中庭には「水がなければ乾いてしまう」と傘用のプールも

在、オリジナルの商品は500アイテムを超える。驚くことに、それらすべての傘は、林さんのアイデアをもとにつくられている。

田園調布にある瀟洒なゲストハウス兼ショールームを訪ねると、林さんが自ら出迎えてくれた。

「ここは、傘のために建てた家なんです。窓ガラスは四重になっていて、室内の温度や湿度も一定に保てます。理想的な環境でしょう？ 贅沢かもしれませんが、傘がそれくらい大切にされる場所があってもいいと思う

のです」と林さんは言う。

ショールームに並ぶ傘を一つひとつ手にとり、その特長や開発秘話を熱心に語る姿からは、自身が開発した傘への深い愛情が感じられた。

### ただ傘が好きだったそれが原動力

林さんは、傘好きが高じて、40歳になって初めてこの業界に飛び込んだというユニークな経歴の持ち主だ。長崎に暮らしていた子ども時代、ひ

まさえあれば近所の番傘職人の家へ上がり込み、傘づくりの様子を飽きることなく眺めていたという。

「当時は、年2回のお祭りでしたか買えないくらい傘は貴重品で、1本の傘を家族で何年も大切に使うのがあります。そんな貴重な品への憧れもあり、手作業でつくられる傘の圧倒的な美しさに、すっかり魅了されたのです。でも、まさかそれが自分の仕事になるとは考えていませんでした」

10代で上京し、東洋医学を勉強して治療院を開いた。すると腕がいいと評判になり、瞬く間に大繁盛。次に飲食店事業へと進出し、そこでも順調に業績を伸ばしていった。他人から見ればうらやましい話だが、林さんの胸中は複雑だった。

「ビジネスとしては成功だったのですが、ずっと何かが違うと感じていました。私は、ほんとは(ものづくり)がしたかった。そのとき、子どものころから好きだった傘を思い出したのです。よし、傘をつくらう。そう考えた途端、迷いがなくなりました」

いくつものことを器用にできないという林さんは、それまでの事業をすべて手放し、傘づくりに全精力を

傾けた。とはいっても、傘づくりの知識もノウハウもないゼロからのスタートだ。まずは、傘の産地である茨城県の古河市に縫製工場を建て、職人を集めた。同時に、傘専用のミシンを事務所に置き、職人を招いて傘のつくり方を必死に学び、技術を身に付けようとした。

「最初は得意になって、自分で試作した傘を持って営業に行っていたのですが、やはり仕上がりがどこか不格好で……。これでは売れるものも売れやしない。ものづくりと言っても、自分は傘のアイデアを考えることに注力した方が効果的だと気づきました」

### 傘への隠れたニーズは暮らしのなかにある

異業種から傘の世界に参入した林さんは、独自の視点から次々とオリジナル製品を開発した。例えば骨が24本ある傘。番傘をヒントに、軽量化を工夫したところ、風に強く美しい傘として話題になった。「洋傘は骨が8本」という業界の常識にとらわれない発想から生まれた製品だ。

2003年(平成15)に発表した「ポケフラット」は薄型の折り畳み

1 ご当地傘の1つである「桜島ファイヤー」。火山灰を避けるために、首から上を覆うキャップ型のフォルム

2 東京・自由が丘にある「Cool Magic SHU' S (クール・マジック・シューズ)」。約1万本の傘が展示されている様は圧巻

傘で、今も同社のいちばんの売れ筋となつている。ポケットやカバンにすっきり収まる傘がつかれないかと考え、扇子の構造から、骨を斜めに重ねて平たく畳むことを思いついた。「生まれて初めて、天才と言われました」と林さんは笑う。

日常のちょっとした気づきから、「こんな傘があつたらいい」と思いつくと、それを形にせずにはいられない。カバンが濡れないように傘の片側を広くした傘、ワンタッチで閉じられる折り畳み傘、男性がスマートフォンに使えるようデザインした男らしい日傘など、林さんがつくる傘はどれも着眼点がユニークだが、たしかに必要とする人がいるものばかりだ。

地方に行けば、そこに暮らす人々の声に耳を傾け、新しい傘のヒントを探す。例えば富山では、「強風や雪の重みで、傘がすぐダメになる」と嘆く声を聞いた。そこで、しなやかに丈夫なFRP製(注)の傘骨を使って強度を上げ、なおかつ軽く、見た目もすっきりとハンサムな傘「富山サンダー」を開発した。

桜島の火山灰に困っている鹿児島の人々のためには、「桜島ファイヤー」をつくった。肩まで覆うキャップ型のビニール傘で、風に舞う火山

灰を防ぐことができる。小学生のランドセルもすっぽり入り、視界を妨げないので安全性も高い。こうしたご当地傘は、地元の人はもちろん、その機能性を評価してさまざまな人が購入している。そのほかにも、海辺の強い紫外線をシルバーコーティングで99%カットする「湘南スーパードラジャンプ」など、遊び心あふれるご当地傘も次々と発表。地方によって気候や環境が異なるように、その土地ならではの特徴をもつ个性的なご当地傘が、全国各地に誕生するものもおもしろいかも知れない。

### もっと楽しく、

### もっと魅力的な傘を

林さんが傘づくりでこだわるのは、バランスと美しさだ。バランスのいい傘は、優れた建築物と同じように、見る者の目に心地よい。さらに、女性用の傘は上品な貴婦人のようなたたずまいで、男性用の傘は力強くクールな男前であることが理想という。「自分のつくりたい傘をつくること」が最優先なので、世界進出には興味がないと言うが、林さんの傘は海外でも人気。日本から大量にお土産として買って帰る人も多い。なか

には品番まで指定する外国人観光客もいる。特に成田国際空港の売店における販売本数は相当なもの。

「自分の傘が広く認められるというのは、やっぱりうれしいですね。実際、日本の傘文化はヨーロッパなどと比べても、とても豊かになってきていると思います。でも私は、もっとも傘を日常生活に取り入れて楽しむようになってほしいですね」

そのためには、ファッションと同じように、新しい魅力的な傘を次々とつくり出すことが大事だという。

「いつも新鮮な驚きがあつて、選ぶのが楽しければ、すでに傘をもっている人でも、また1本、さらに1本と買ってくれるでしょう。だから手に入れやすい価格帯を維持するのもとても重要なんです」

頭のなかには傘のアイデアがあふれていて、時間がいくらあつても足りない。その究極の目標は、「人類を傘から解放すること」だそうだ。

「天気予報を見て、今日は雨が降るのか、傘を持っていくべきなのかを毎日悩むのは煩わしいもの。だから私は、常に携帯できる万年筆サイズの傘をつくりたいのです。そうすれば、急な雨に遭遇しても、傘を持ってなくて悔しい思いをする人がいなくなります。決して夢物語ではありません。私が生きているうちに、必ず完成してみせますよ」

林さんの話を聞いていると、傘の進化が楽しみになってくる。次はどんな傘を生み出して、私たちを驚かせてくれるのだろうか。

(2015年4月24日取材)



迎賓館「御秀」地下1階のショールームで、お気に入りの傘を手にする林さん

### (注) FRP製

FRPとはFiber Reinforced Plasticsの略称で、繊維強化プラスチックを指す。ガラス繊維などをプラスチックに混ぜて強度を向上させた複合材料。

# 「傘の下の空間」と「雨に対する感性」

## 傘の下の空間は まぎれもない文化



株式会社福井洋傘  
代表取締役社長  
橋本肇さん

### 嫁入り道具の傘に 込められた思い

「相合い傘」は日本独自の文化といわれますが、基本は蛇の目傘です。蛇の目は傘が2段階調整できます。ピンと広げた状態で歩くと人目が気になって恥ずかしい。だから1段落として陰をつくる。しかも傘をすぼめるわけですから、空間が狭くなって2人はさらに寄り添える、というわけです。

福井には「傘渡し」の儀式が残っています。かつては各地にありました。嫁入り道具の1つとして傘をもつ人は多いですが、傘に込められた意味を知らないのが、なかには「あら、捨てちゃったわ」なんていうおばあさんもいます。

嫁入り道具でもたせる傘には、親が娘を嫁がせるときに「どうかこの子を守ってください」と思いを込めるので、霊力がとても強い。昔は使われなくなった蛇の目傘を、厄除けと

して天井裏に上げたそうです。江戸時代初期の伝説的な彫刻職人、左甚五郎が魔除けのために置いたと伝わる「知恩院の忘れ傘」も同じ意味合いでしょう。今でも宮大工に家を建ててもらおうと、床柱に傘を1本くくりつけるそうです……といったような話を私は各地でしています。

社員にも、傘にまつわる文化的な話をするように伝えていて、「君たちは傘の文化の布教活動に行く宣教師なんだ！」と発破をかけています。

### 傘を売るのではなく 文化を売る

私たちの会社は傘ではなく、文化を売っている——そう思っています。「傘の下の空間を売っている」と言い換えてもいい。空間とは、床の間と同じように「あつてもなくてもいいもの」ですが、床の間という空間を楽しむことから、掛け軸や生け花などが発達しました。相合い傘は傘の下の空間から生まれたものですね。

傘は文化という意識が今は薄らいでいます。そこで考えたのが、玩具の要素を持ちあわせ子ども向けの傘です。子どもが成長して使えなくなったら、次は生地を張り替えてお母さんの日傘にする。子どもは「傘はずっと使えるものなんだ」と受け止めますし、自分の子にもそう教えるでしょう。文化とは、今を生きる私たちだけのものではありません。次の世代にもきちんと伝えていきたいですね。

福井洋傘・橋本肇さん、  
岐阜市歴史博物館・大塚清史さんの、  
傘に対する眼差しを紹介する。

## 日本の自然観が生んだ 雨に寄り添う和傘



岐阜市歴史博物館  
学芸員  
大塚清史さん

### 日本の芸能・文化を ひそかに支える傘

岐阜の伝統工芸には、和傘のほかに岐阜提灯と岐阜団扇があります。いずれも主な素材は和紙と竹と木。もともと日用品ですから美的価値を高めなければ淘汰されてしまいますが、岐阜にはそれを支えるだけの技術や文化があったので今日まで生き残りました。

ところが和装がすたれてしまった。扇子が残っているのは日本で西洋風の製品が受容されなかったからで、和傘はそうではない。

価値を高めると価格に反映せざるを得ないので「高いね」で片づけられてしまいますが、仮に和傘がなくなれば歌舞伎を洋傘で演じなければなりません。実は、洋傘が普及した明治時代、歌舞伎を洋傘で演じようと試みています。浮世絵が残っていますが、どう見てもおかしい。祭祀で和傘の代わりにパラソルを使うのと同じことですから。

そう考えると、和傘は日本の伝統芸能や文

化を支える重要なアイテムといえます。あまりにも身近なため、私たちは文化的な価値を見落としていたのではないのでしょうか。

### あえて遮断しなかったのは 雨の表情を感じるため

とはいえ、和傘は決して使い勝手のよいものではありません。

雨に濡れたら陰干しが必要ですし、風通しのよいところに天ろくろを上にして吊るしておかないと水が溜まって腐ってしまいます。江戸時代の人も扱い方がよくわからなかったようで、傘屋がわざわざ取扱説明書を付けて販売していたほど。つまり「手間」がかかります。

さらに、和傘は傘紙に油を引いても水はにじむので、雨を完全に遮断することはできません。雨をしのぐという本来の役割からみれば、現代では「不便」といわれるでしょう。

しかし、この「手間」と「不便」がきわめて日本的だと思います。

西洋と比べて、日本は「自然と寄り添う」文化です。雨についても多くの表現が残されていますね。和傘は、紙や竹など自然由来の素材を使いつつ、そんな雨の多彩な表情も繊細に感じとる「雨に寄り添う道具」のように思います。

日本には「自然に生かされている」という人間中心ではない価値観があり、それを築きむ術もかつての日本人は知っていたように思います。

# 「弁当忘れても傘忘れるな」 ——言い伝えが生きる金沢市の貸し傘

2015年（平成27）3月14日、北陸新幹線が金沢駅まで開業した。戦災に遭わずかつての姿を今に残す武家屋敷跡、日本三名園に挙げられる兼六園、現代アートの拠点となる金沢21世紀美術館など魅力的なスポットが目白押し。その金沢市中心部では、市役所が6年前から、そして商店街が今年3月から貸し傘サービスをスタートした。なぜ貸し傘にそれほど力を入れるのか。その理由を知りたくて金沢市を訪ねた。



「濡れたままの傘をお貸しするのは申し訳ないので、できるだけ乾かしてからお出しするよう心がけています」と話す観光案内所の南 春名さん

## 傘と長靴が借りられる 北陸の玄関口

東京駅から北陸新幹線に揺られること約2時間30分。金沢駅まではあつという間だった。首都圏と北陸地方がグッと近づいたことを実感する。

金沢駅の構内にある観光案内所に立ち寄ると、入り口付近には色、柄、サイズもさまざまな傘が傘立てに入られていた。金沢市の中心部16カ所に設置されている「置き傘サービス」だ。

突然の雨に見舞われたとき傘を借りることができるし、使い終えたら16カ所ある指定施設の専用傘立てに戻せばいい。貸出書への記入など面倒な手続きは一切不要。観光案内所ゼネラルマネージャーの吉岡一栄さんによると、観光案内所の置き傘サービスは2003年（平成15）にスタートしたもの。

「傘が戻ると『濡れたままで臭いがついてしまう』と女性スタッフたち





1



2



観光案内所  
ゼネラルマネージャー  
吉岡一栄さん



3



右：金沢市経済局営業戦略部観光交流課 係長  
浅野成貞さん  
左：同観光交流課主事 飯田真理さん

1 金沢駅の観光案内所の入り口にある「置き傘」  
2 観光案内所では貸し長靴のサービスも実施  
3 市の「置き傘サービス」に協力するクロネコほっとステーション おもてなし隊の皆さん

が以前はオフィスで陰干ししていた」

ここでは長靴も借りられる。82足（男女各41足）が用意されており、天候が不安定な12月から2月を中心に、年間200〜300件もの貸し出しを記録。利用者の多くは、革靴やスニーカーで訪れて雨や雪に見舞われた県外および海外からの旅行者。旅先に長靴を持っていくことはまずないのでうれしいサービスだ。

### 電車内の忘れ物傘で まち歩きをサポート

金沢駅の観光案内所が先行していた置き傘サービスを、金沢市がプロジェクト化したのは2009年（平成21）2月のこと。金沢で著名な歌手の竹仲絵里さんとの共同プロジェクト「みんなのRe:kasa」として「置き傘マップ」を作成し、HPや看板などで案内を始めた。

「金沢のまちなかをぜひ皆さんに楽しんでいただきたい。置き傘はそのための施策の1つです」

そう話すのは、金沢市経済局営業戦略部観光交流課の係長、浅野成貞さん。金沢城公園や金沢三茶屋街を含め、主な観光スポットは浅野川と

犀川に挟まれた比較的コンパクトなエリアに集中している。

「金沢市民はバスやクルマに頼りますがですが、東京の人たちはふだんから歩き慣れているので、徒歩で回る方も多いですよ」と浅野さん。

傘は電車内の忘れ物傘を用い、1カ月で約400本を補充する。観光パンフレットと併せて配送・補充するため、経費面で大きな負担はなく、今後も続けていく考えだ。

### 新幹線開業を機に 商店街が「貸し傘」

金沢駅兼六園口（東口）から南東へ1km行くと、1721年（享保6）に始まった「近江町市場」がある。武蔵地区と呼ばれるこの一帯でも、2015年3月から商店街による「貸し傘」がスタート。「傘貸し出します」というシールを店頭に貼った約100店舗から傘を借りられる。

これは5つの商店街振興組合と4法人が構成する金沢中心商店街武蔵活性化協議会が始めた「おもてなしシール事業」（以下、シール事業）の1環。貸し傘、写真撮影、荷物預かり、道案内、英語での案内、お勧めスポット紹介の6つのサービスで訪れた

右：金沢駅兼六園口（東口）にある差し出す雨傘をイメージしたガラスのドーム「もてなしドーム」（奥）と、伝統芸能に使われる鼓をイメージした「鼓門」（手前）



金沢中心商店街 武蔵活性化協議会が配布するシール。貸し傘を含む6つのサービスの目印となる



左：金沢中心商店街 武蔵活性化協議会 事務局長 長田憲道さん  
右：シール事業に協力するシュー・ショップ・セブンの所村 眞さん。横安江町商店街振興組合の理事長を務める



株式会社 九谷焼諸江屋の諸江洋さんと店頭にある置き傘



人をもてなす。加盟店に協力を要請した事務局長の長田憲道さんは、予想以上の反響だったと明かす。

「武蔵地区には約600店ありますが、手を挙げるのは30店くらいと思っていました。あまりに多いので、鉄道会社に急遽お願いして忘れ物傘を計700本提供いただきました」

このうち200本は、武蔵地区のシール事業に賛同した香林坊、片町、堅町、柿木島、広坂からなる金沢5タウンズ（金沢中心商店街まちづくり協議会）に提供。これによって市内中心部の大部分を網羅した。

金沢5タウンズの会長を務める株式会社 九谷焼諸江屋の諸江洋さんは「構想を聞いて、いい取り組みだと思いましたので一緒に始めました」と語る。諸江さん自身、6年前から市の置き傘サービスに協力している。

「うちの店には高校生や近所の方も傘を借りに来ます。そして『ありが

とうー』と返しに来てくれる。誰も が気軽に立ち寄れるお店であるべきですし、もつといえれば金沢市全体がそういうまちでありたい。だからやめようとは思わないですね」

### 気候風土が生んだ 傘と市民の身近な関係

一時期、東京をはじめ各地で貸し傘が行なわれていたが、その多くが尻すばみ。なぜ金沢は広がっているのか。それは、歩く観光客が多いから、という理由だけではなかった。

金沢をはじめ北陸には「弁当忘れても傘忘れるな」との言い伝えが残る。とにかく傘だけは持つておけ、という先人からの教えである。取材で会った人たち全員がこの言葉を口にした。特に秋から冬にかけては、晴れていたと思ったら土砂降りになり、真夜中でも頻りに雷雨が発生する。金沢地方気象台によると、石川

県の年間雷日数は日本でもっとも多く、特に冬の雷が多く観測される。長田さんは中学生の頃、「傘を持つて行きなさい」という母の言葉を聞かず、びしょ濡れになって帰ったことが多々ある。「ですから今もクルマとオフィスには2〜3本ずつ傘を備えていますよ」と苦笑する。過去に

苦い思いをしているからこそ、金沢市民の傘への思いはひととき強い。吉岡さんは折り畳み傘を常に携え、浅野さんは秋になると長傘を手放さない。浅野さんと同じ観光交流課の

主事、飯田真理さんは「冬は天気予報が『晴れ』でも、必ず長傘を持ち歩きます」と言い切る。市の置き傘サービスに協力するクロネコほっとステーションの稲乃梨子さんと中村友紀さんは「傘は4〜5本もっています

ますが、風の強い日は骨が折れてもいいように古い傘から使います」と笑う。「晩秋から冬は、晴れた日に長傘を持って長靴を履いていても恥

ずかしくない」(浅野さん)という土地柄からは、傘と人との身近な関係が垣間見える。

また、かつて加賀百万石と称され、今も伝統工芸・芸能が息づく古都としての矜持もある。「金沢は武家文化ですよ」と浅野さんが言うように、小京都と呼ばれることをよしとしな

い。3つの茶屋街をはじめとする古いまちなみを残しつつ、手を入れるべきところは入れる「保存と開発の調和」は市職員全員が意識するキーワードだ。「また来たいな」と思っていたただくための取り組みの1つが傘なのです」と浅野さんは語った。

金沢駅兼六園口(東口)にあるガラスドームの通称は「もてなしドーム」。訪れる人に差し出す雨傘をイメージしてつくられたものだという。気候風土と来客をもてなす心が、自由

(2015年4月27日取材)

# 「傘の下の空間」を感じる文化

編集部

「変化の兆し」から  
日本の傘に着目

傘はかつてステータスのある贅品だった。その証拠に、少なくとも昭和50年代までは「包丁とぎゝ傘なおしよ」と音声を通してクルマで回る修繕業者が都内にもいた。そういう商売が成り立つほど、直しながら使う人が多かったのだろう。

民俗学者の神崎宣武さんは「傘の扱いが大きく変わったのは、ビニール傘の登場から」と言い、服飾史家の中野香織さんも「ビニール傘の登場は革命的な出来事」と取材中に指摘していた。いつでもどこでも手に入るビニール傘は便利だ。どこかの傘立てに入れると、自分のものがわからなくなるのは少し困るけれど。

傘に興味をもって調べていくと、意外なことがわかったと先に述べた（P4）。フォルムや素材に強いオリジナリティーをもつ傘が売れていること。自分の好きな色の傘生地や手元が選べるセミオーダーの店や1万本もの傘をそろえた専門店がオープンしていること。こうした、まだ小

さいかもしれないけれど「変化の兆し」から、さらに関心は高まった。

情熱を注ぐ人や地域を  
訪ねてわかったこと

特集の軸に「傘に強い思いを抱く人や地域」を据えると、傘を巡る新たな動きが見えてきた。

「日本から洋傘づくりがなくなってしまう」と廃業を踏み止まった福井洋傘の橋本肇さん。職人を社員として迎え入れ、和傘の継承に取り組み国内屈指の生産地・岐阜市加納地区の藤沢健一さんと岐阜和傘の研究を受け継ぐ大塚清史さん。従来の傘ではあり得ないフォルムの傘をつくるジョン・デイチェザレさん。楽しくて便利な傘をたくさんの人に届けたいと毎日アイディアを練る林秀信さん——いずれも情熱をもって傘をつくりつづけている人たちだった。

取材を通じて、人目を惹くデザイン、雨音さえ甘美に響く傘、価格以上の機能を備えた風土に合った傘、日本の伝統を伝える高級な洋傘、文化そのものを継ぐ和傘などに触れた。

傘について知らなかったことを痛感するとともに、たくさんの傘が選べる環境にあることを素直に喜ぶたい。

「傘の下の空間」と  
自然との関係

一方、日本の傘は文化と呼べるものなのか。それは海外と比べると見えてくる。

デイチェザレさんは、和傘のろくろを自分でつくれなかった過去を明かし、「あれこそが日本の文化」と語った。日本の精緻な技術は1つのカギになる。海外から取り入れた洋傘は日本で独自の進化を遂げ、今では外国が日本を手本にしているという。一生懸命つくっていたらいつの間にかトップランナーだったという事実は、日本の特性を表している。

また、日本人が色とりどりの傘をさして歩く風景を見て感激したデイチェザレさんは、歩くことを厭わない日本人と、歩くことを前提とした都市計画も、日本の傘文化を豊かにした要因ではないかと指摘する。

歩くといえ、イギリスで暮らし

ていた中野さんは、傘にまつわる日本特有の文化として「相合い傘」を挙げた。2人で肩寄せ歩くと、傘の下の空間はたしかに特別なものとなる。神崎さんも、枝葉の役割と前置きしつつ、傘がつくる空間を「境界（天蓋）」と見立てた歴史に触れた。

あまりにも身近なために普段は意識しないけれど、日本の傘は文化と言ってもよいのではないかと。特に「傘の下を空間と捉える観点」は、日本人特有のものかもしれない。

雨のなか、傘がつくる空間に身を置くと、降り方によって変わる雨音、傘の手元から伝わる風の変化、歩く場所によって変わる匂い——こうした多くの情報を傘から、そして五感から受けとっている。大塚さんが言った「日本は『自然と寄り添う』文化」と併せて考えると、日本人にとって傘とは「雨に寄り添う道具」なのではないだろうか。

傘を手にも雨のなかを歩く。それが雨に関する豊かな表現を生み出し、絵画や詩歌で多くの作品を残してきた。傘の下の空間を意識すると、雨の日が楽しくなるかもしれない。

# 雨水利用を やってみよう



古賀 邦雄 さん  
こが くにお

古賀河川図書館長  
水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業。水資源開発公団（現・独立行政法人水資源機構）に入社。30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。2001年退職し現在、日本河川協会、ふくおかの川と水の会に所属。2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設。URL: <http://mymy.jp/koga/>  
平成26年公益社団法人日本河川協会の河川功労者表彰を受賞。

〔注1〕墨田区の雨水利用の現状は、第15回里川文化塾「拡がる雨水利用」実施報告をご覧ください。

〔注2〕「雨水ハウス」については、水の風土記「人ネットワーク」をご覧ください。当センターHP: <http://www.mizu.gr.jp/>

## 雨水は貴重な水資源である

朝、顔を洗う蛇口の水は元をたどれば天の恵み、雨水である。森に雨が降り、川となり、海へ、一部は地下水となり、海へ流れ込む。また森に雨が降る。この水循環のなかであらゆる生物は生かされている。現代人は、雨をうつつうしいものだと考え、雨水の重要性が薄れているようだ。しかしながら、身近な水の1つの形態である雨水を捉え直そうとする考え方があつた。それは

雨水を溜めれば貴重な水資源、捨てるなんてもつたないという、活動が全国的に拡大していることだ。タンクなど雨水利用施設を設置して、溜めた水を積極的に日常生活に活かそうとする活動である。いちばん簡単な方法は、雨の日、軒下にバケツを置けば水を集めることは可能だ。雨水利用にかかわる書を見てみたい。

グループ・レインドロップス編著『やってみよう雨水利用―まちをうるおすみんなの工夫』（北斗出版・1994）には、雨水を集め、溜め、浄化し、給水する独創的なアイデアをあげる。

その雨水利用とは①家庭菜園②植木の水③洗車④道路等の打ち水⑤防火水槽

⑥トイレの水⑦洗濯に使用される。また、個人住宅、集合住宅、ビル、病院などでは新・増改築においてコンクリートの雨水貯留槽を地下に埋設し、雨樋から水を集め、雨水貯留槽に溜め、それをトイレの洗浄水、散水、洗車に使っている例が図で紹介されている。雨水は中水道の役割を担っている。

雨水市民の会の辰濃和男・村瀬誠著『雨を活かす ためることから始める』（岩波書店・2004）をめくると、雨を活かす体験、水一滴の大切さ、雨水を捨てるな宣言、わが家の雨水タンク、都市洪水対策、断水対策、マンションで雨と遊ぶなどが述べられている。雨を活かす極意として、初期雨水はカットして、暫く待つて溜める。溜める極意は汚れをタンクに入れないこと、沈殿物を攪拌させないことを指摘する。

さらに、世界の知恵として、中国の農村における作物の増産と土壌侵食防止に貢献する雨水利用、バングラデシュではヒ素汚染地下水に替えて雨水を、オーストラリア・タスマニアではシ

トに集めた雨農業を、などその利用を掲げている。

この書の表紙には、地下タンクに雨水を溜め手押しポンプで水を汲む墨田区向島の「路地尊」が描かれている（注1）。

このような雨水利用を本格的に提唱した東京都墨田区環境保全課（当時）の村瀬誠は「ドクトル雨水」と呼ばれている。彼を追った秋山眞芸実著『ムラセ係長、雨水で世直し！』（岩波書店・2005）がある。現在、世界では至るところで紛争や戦争が起こっている。水戦争さえも起こっている。この状況を打開する鍵は雨水利用が握っているという。

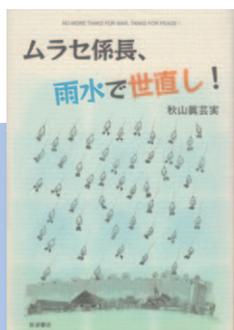
村瀬の雨水利用哲学がこの書に、次のように表現されている。「戦争のためのタンクはいらない、それより平和のための雨水タンクを」"No more Tanks for War, Tanks for Peace"。雨水の利用が世界の平和に貢献し、水ストレスの国々に安らぎをもたらすことになる。また地球温暖化による気候変動に伴う大水害が起こっているが、雨水を溜め、利用することで減災を図ることになる。

## 雨と生きる住まい

長雨、霧雨、村雨という言葉があるように、雨の多い日本では、昔から人々は住まいのなかで雨と共有する知恵を備えていた。安藤邦廣ら著『雨と生きる住まい 環境を調節する日本の知恵』（JIX出版・2014）では、大雨、長雨、湿気に備え、日本の住まいはヨーロッパのように、強固な壁をつくり密閉するという考え方はなかった。密閉すると湿気を逃がすことができな

い。屋根に傾斜があるのは雨が家屋に浸入することなく、流れやすくするためであり、茅葺屋根はより流れやすくするため急な傾斜になっている。雨除けの工夫、庇や縁側、雨戸は雨が形づくってきたといえる。現代の日本建築は、雨を活かし、楽しむ、究めることを追求している。日本建築学会から、建築が雨を育み、雨はかりて、かえずもの、それが雨をつくることになるという『雨の建築学』（北斗出版・2000）

0）、雨を暮らしに活かす、飲める水、遊べる水、育てる水をつくり、また雨水を大地にかえし、空にかえし、生き



物たちにかえす考え方の『雨の建築術』（北斗出版・2005）、頻発するゲリラ豪雨などの雨との付き合い方を追求した『雨の建築道』（技報堂出版・2011）の3部作が刊行されている。

住宅プロジェクト報告書（2012）としてまとめられている。

### 雨水利用システム

福岡市内は都市化の発展により、大雨が降ると洪水にたびたび見舞われている。2009年（平成21）7月24日に樋井川流域で水害が発生した。この水害以前から減災を図るための、雨水タンクの設置を福岡市などの助成金で行なっているが、なかなか普及が進まないのが現状である。実際に、福岡市城南区の渡辺家は、2012年（平成24）4月地下タンクを設置した「雨水ハウス」を完成させた（注2）。わが国では初めての本格的な「雨水ハウス」ではなからうか。都市型水害抑制のために設置した地下貯留タンクは、1つめは家の基礎を兼ねたコンクリート製の貯留タンクで、その容積は約17・3m<sup>3</sup>ほどであり、この貯留した水を庭への散水・トイレの洗浄水、洗濯用の水として利用する。2つめの地下貯留タンクは防災用のタンクで、その容積は約22・5m<sup>3</sup>であり、家の基礎部分の地下タンクが満水になるとオーバーフローした雨水が流入しはじめ、このタンクの上側半分は地下へ浸透させる構造になっている。3つめのタンクはピオトープ用のタンクで、その容積は約2m<sup>3</sup>で、環境用水として利用する。今ではお風呂にも使用されており、肌触りも快適だという。この「雨水ハウス」の建築過程について、福岡県建築士会福岡支部編・発行『雨水利用実験

都市化の拡大は、都市水害の危険性都市環境の悪化の問題を発生させる。望ましい都市環境を図るため、雨水を都市における重要な環境要素としてとらえ、適正な雨水の流出・貯留・浸透・利用システムを構築することが大事である。そのことをまとめたのが科学技術庁資源調査会編『都市の雨水を考える―潤いと水循環の回復をめざして』（大蔵省印刷局・1987）である。具体的に取り組んだ書として、角川浩著『天の恵みを活かす はじめての雨水利用』（パワー社・2010）は、拡大型雨水浸透枘、雨水用のマイクロ地下ダム、独立型雨水集水パネル、貯水容器（タンク）等の製作がわかりやすく書かれている。また、湯川清貴著『雨水利用システムの製作』（パワー社・2006）は、トイレの水に雨水システムを取り入れている。総合的に、全国的に雨水利用システムについてまとめた、雨水貯留浸透技術協会編『雨水利用ハンドブック』（山海堂・1998）も出版されている。

### 雨と日本人

日本人の暮らしと雨は密接な関係を持つているといえる。倉嶋厚監修『雨のことば辞典』（講談社・2000）をみると、春の雨に育花雨・甘雨・桜

雨・藤の雨、暖雨とあり、夏の雨に青時雨・一陣の雨・青葉雨・脅し雨・白雨・涼雨のことがあり、秋の雨に驟雨・御山洗い・七夕流し・豆花の雨・冷雨と並び、冬の雨に雨雪・雨水・鬼洗い・寒九の雨・北山時雨・富下りなどのことが1190語集められており、雨についての言葉がこんなに多くあることに改めて驚く。同様に高橋順子・文、佐藤秀明・写真『雨の名前』（小学館・2001）には、422語の雨が表現されている。

### レインドロップス編著『雨の事典』

（北斗出版・2001）には、空と海と大地をつなぐ雨のことが述べられている。その内容は、雨と日本人、暮らしに生きる雨、地球をめぐる雨、生命はぐくむ雨、雨を活かすと5章で構成されている。この一冊を手元に置いておけば、雨の事がすぐに理解でき、雨博士になれる。宮尾孝著『雨と日本人』（丸善・1997）では雨は癒しの心をもたせ、小林享著『雨の景観への招待 名雨のすすめ』（彰国社・1996）では、雨とは、春夏秋冬そして梅雨と秋霖、毎年繰り返される季節の循環、そのめぐる季節の情趣を一段と鮮やかにしてくれるものの1つであるという。情趣を綴った随筆には中村汀女編

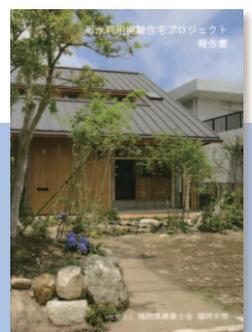
『雨』（作品社・1986）、吉沢深雪著『雨がくれる50のしあわせ』（大和書房・2002）がある。

### 雨と子どもたち

終わりに、雨の童話をあげてみる。

子どもたちは雨が大好きである。松野正子さく・原田治え『かさ』（福音館書店・1985）は、あかいかさ、きいろいかさ、あおいかさ子どもたちの傘がそれぞれ描かれていて楽しい。こいでやすこさく『かさかしてあげる』（福音館書店・1996）は、蛙、兎、狸、熊さんたちが植物の葉っぱの傘を女の子に貸してあげる話である。あまんきみこさく・垂石眞子え『わたしの かさはそらのいろ』（福音館書店・2006）は、可愛い女の子が青い傘をお母さんから買ってもらい、雨のなかを原に入ると寄ると、子ネズミたちが傘にウサギや子ぎつね、子鹿も入って、入ると傘に入ってくる。虫やスズメや鳩たちも入ってくる。大きな虹が出て雨がやみ、女の子は青い傘をたたみ、そのとき傘は笑っていました。ピーター・スピアーさく『雨、あめ』（評論社・1984）、U・シエフラー作『あめの日のおさんぽ』（文化出版局・1986）もまた、ほのぼのとした、微笑みが浮かんでくる作品である。

以上いくつかの雨にかかわる書をあげてきた。雨水利用の効用は、水害や洪水に役立ち、水ストレスの国々にとっては水資源となり、さらに、水戦争をくい止め、戦争というタンクでなく、雨水タンクの普及が世界の平和に貢献する。これからは、人類が雨水をもっと大切にそして、もっと雨水を活かす社会の構築が求められている時代だ。（なみなみと 路地尊雨と 情を貯め）（吉岡 裕）



ほうとう  
(山梨県)

うどんとは似て非なるもの

周囲を山に囲まれ、大小の河川が流れる山梨県。郷土食「ほうとう」

は、うどんと同じく小麦粉を水で練るが似て非なるものだ。その特徴は、

①生地を寝かささない、②麺が幅広で少し扁平（うどんは主に丸型）、③練る

ときにほとんど塩を使わず、湯に通ささないでそのまま煮込む、④味付け

は味噌が一般的など。また、ほうとうはかぼちゃを用いるため冬の料理

のイメージが強いが、実は季節の野菜を用いて年中食される料理である。

甲斐国あるいは甲州と呼ばれた江戸時代、すでに果樹の産地として知られていたが、ほうとうもまた甲州

名物として名が通っていた。

「1815年（文化12）にこの地を訪れた修験者の泉光院（野田成亮）が

『今夕は當國（當國）の名物ハウトウと云う馳走あり』と書き残している

す」

そう話すのは山梨県教育庁学術文化財課の中山誠二さん。山梨県立博物館の学芸課長だった2008年

（平成20）、企画展「甲州食べもの紀

煮立ったほうとうをいただく。もっちりした幅広の麺に、かぼちゃなどの風味が絡み合う、奥行きのある味

# 水車によって広まった ほうとう

水と風土が織りなす食文化の今を訪ねる「食の風土記」。今回は関東を中心に山梨県の郷土食として知られる「ほうとう」を取り上げます。小麦粉を水で練り込み、包丁で幅広に切った麺を、かぼちゃなどの野菜の味噌汁のなかに入れて一緒に煮込むほうとう。そのルーツは、思いのほか古いものでした。



平地の少ない山梨県はかつて畑作が中心で、主食は小麦だった。限られた平地では果樹が優先。わずかに残った土地で野菜を育て、ほうとうにして食した

出典	作者	時期
齊民要術	賈思勰	6世紀
入唐求法巡礼行記	円仁(慈覚大師)	839年(承和6・開成4)
枕草子三一九段	清少納言	996年(長徳2)ごろ
御堂関白記	藤原道長	1007年(寛弘4)
台記別記	藤原頼長	1151年(仁平元)、1153年(仁平3)
伊呂波字類抄	橘忠兼	12世紀
裏見寒話	野田成方	1754年(宝暦4)
日本九峯修行日記	泉光院(野田成亮)	1815年(文化12)

はくたく 餛飩・ほうとう記載記事文献一覧(近世以前)

図録『甲州食べもの紀行』(山梨県立博物館 2008) から一部抜粋し、編集部で作成



山梨県教育庁 学術文化財課 文化財指導監 中山誠二さん

「藤原頼長は『小豆の汁で食べる』と書き残していますが、北杜市須玉町のほうとう祭りでは今も『小豆ほうとう』を食べています」

行」開催にあたって調べたのだ。ほうとうは「餛飩」が訛った言葉とされているが、中山さんが文献で辿ると6世紀の中国・北魏の農書『齊民要術』(注1)に「調味した肉汁で小麦粉を練りあわせて平らにし、煮立った湯のなかに入れて食べるとおいしい」という餛飩の説明があった。小麦粉を使うこと、平たく延ばす点は今と変わらない。

水車の普及で家庭食に

餛飩を最初に記した日本人は、9世紀に遣唐使と中国に渡った天台宗の僧侶・円仁。また清少納言や藤原道長の日記にも登場している。「当時は寺院などで貴族の儀礼食、つまり(ハレ)の食べものだったようです」と中山さん。ほうとうに近い「ほうとう」という発音は、12世紀の辞書『伊呂波字類抄』(注2)に見られる。鎌倉時代、戦国時代を飛び越え、ほうとうの名前が再び史料に出てくるのは製粉技術が一気に普及する江戸時代。「武田信玄がいた戦国時代は小麦などの穀物を粉にする石臼などの道具が普及します。記述こそないもののほうとうも食べられていたはず。しかし庶民が家で日常的に食べ

るようになったのは水車のおかげです」と中山さん。18世紀、甲州では水車が爆発的に増えた。水は豊富で地形は起伏に富む。小麦から粉を挽く動力を得るにはもってこいだ。平地が少なく稲作は不向きだったことも家庭食として根づいた理由だ。撮影に協力してくれた専門店「ほうとう蔵歩成」の榎原誠さんは子どもはほうとうを食べていたという。「初日はほうとう、2日目はごはんを入れて食べる『煮返し』のほうとう」でした。おもしろいのは、ひいおばあちゃんがつくるのはすいとん状で、おばあちゃんは長くて太い麺だったこと。家ごとに味も、野菜もさまざまだったはず。給食にも出ましたよ」

ほうとうは粉食料理なので工夫の余地が大きく、榎原さんが話すようにさまざまに形を変えてきた。中山さんは「ずっと同じ料理ではないですが、小麦粉で練る平らな麺という特徴は変わっていませんね」と話す。食が多様化した今、地元の人たちは家でほうとうを食べないそうだ。そばやうどんよりも長い歴史をもつほうとうを、ぜひ受け継いでほしい。

(2015年4月22日取材)



4 季節ごとに野菜や根菜類、きのこ類を使う。肉を入れるようになったのは近年から



3 味のメインは味噌。県内にはしょうゆベースの汁を使うところもある



2 専門店では衛生面に配慮してさつと湯に通す



1 幅広く平らなほうとうの麺  
ほうとう専門店「ほうとう 歩成」にて撮影



株式会社歩成 取締役 榎原 誠さん  
「県民が自宅でほうとうを食べること自体少なくなっている今、専門店には食文化を次代につなぐ使命もあると考えています」

(注2)『伊呂波字類抄』

平安時代末期につくられた日本の古辞書。ことばの配列をいろは順にしたことは、その後数百年にわたる辞書の構成のもととなった。

(注1)『齊民要術』

中国の現存する最古の農業技術書。五穀の種植法から酒、醤油の製法など農業生産物の加工まで、広範囲に及ぶ農業技術を説く。

# 郊外化した過疎地に生まれる、 「ゆるさ」の魅力

——徳島県名西郡神山町

人口減少期の地域政策を研究し、自治体や観光協会などに提案している多摩大学教授の中庭光彦さん。ミツカン水の文化センターのアドバイザーも務める中庭さんが「おもしろそうだ」と思う土地を巡る連載です。将来を見据えて、若手による「活きのいい活動」と「地域の魅力づくりの今」を切り取りながら、地域ブランディングの構造を解き明かしていきます。その土地ならではの魅力や思いがけない文化資産、そして思わぬ形で姿を現す現代の水文化・生活文化にご注目ください。



**中庭 光彦**さん

なかにわ みつひこ

多摩大学経営情報学部事業構想学科教授  
多摩大学研究開発機構総合研究所副所長

1962年東京都生まれ。中央大学大学院総合政策研究科博士課程退学。専門は地域政策分析・マネジメント。郊外や地方の開発政策史研究を続け、人口減少期における地域経営・サービス産業政策の提案を行なっている。並行して1998年よりミツカン水の文化センターの活動にかかわり、2014年よりアドバイザー。主な著書に『オールヒストリー・多摩ニュータウン』（中央大学出版部 2010）、『NPOの底力』（水曜社 2004）ほか。

魅力づくりの  
教え **2**



南仏の家庭料理を供する「カフェオニヴァ」。  
造り酒屋を改装した雰囲気の良いレストラン



1 グループやカップルはもちろん、1人で来てもらうける  
2 絶品だったチーズ 3 オーガニックワインやオリーブオイルなどこだわりが強い 4 快く撮影に応じてくれたカフェオニヴァの皆さん（右から長谷川浩代さん、齊藤郁子さん、國本量平さん）。3人も町外からの移住組だ



## 山のビストロ

今、徳島県名西郡の神山町という人口5903人（2015年6月）のまちが全国から注目を集めている。スタチの生産量日本一というまちで、見回すと四方が山という、一見するとどこにでもある山里だ。

このまちの古民家を改装し、都市部の企業がサテライトオフィスとして使ったり、素敵なフレンチレストランが営業している。平成23年度は転入人口が転出人口を上回った。また、若い人々の交流が生まれている。いわゆる「増田レポート」（注1）では「消滅可能性都市（注2）20位」と書かれながらも、一方で神山町はこれからの過疎地を蘇らせる1つのモデルになると期待が寄せられているのだ。

では、実際はどうなのか。この集落のほぼ中心部にあるのが「カフェオニヴァ」。われわれ取材チームはここで夕食をとることにした。造り酒屋を改装したビストロで、最初に出されたチーズからおいしく、ディナーを楽しんだ。シェフにお話をうかがうと、毎年1カ月は営業を休みフランスに逗留し、いいワインを楽しんでくると言

### （注1）「増田レポート」

民間研究機関「日本創成会議」人口減少問題検討分科会（座長・増田寛也氏）が「2040年までに全国のおよそ1800市町村のうち、896の市町村が消滅する恐れがある」と2014年5月に発表した試算。

### （注2）消滅可能性都市

2010年の国勢調査をもとに試算した結果、今後30年間（2040年時点）で若年女性（20～39歳）人口の減少率が5割を超えると推計された自治体のこと。

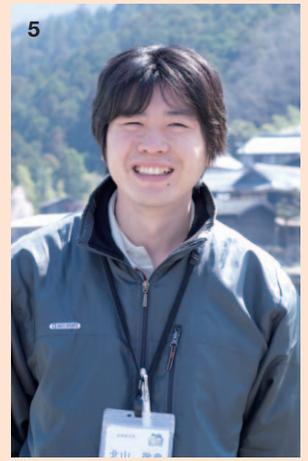
右：神山町の中心部を流れる鮎喰川（あくいがわ）。少し下流の寄井座（よりいざ）周辺はかつての船着場で、サテライトオフィスもある



5 移住交流事業を担当していた神山町産業観光課主事の北山敬典さん。取材後に異動となり、現在は総務課

6 カフェ&レストランの「粟カフェ」。カフェオニヴァもそうだが、こうした飲食店があるのとないのでは、住みやすさは格段に変わる

7 粟カフェのランチメニュー「古代米カレー」



う。オーガニック野菜にこだわって、これから神山町の農家と協力して栽培も始めるといふ。お客さんは近くから来る方が多いようで、近隣の方々が話が弾んでいる。豊かな暮らし。森の香りがするなかでほっとできる場だ。このコーナーは「魅力づくりの教え」だが、魅力といってもいろいろな表現がある。このビストロでは、一流のフランス料理を神山町の風土のなかで味わった。すると気持ちがフワッとゆるんでくる。ここならば長逗留してもいいかな。そんな魅力について考えたくなった。

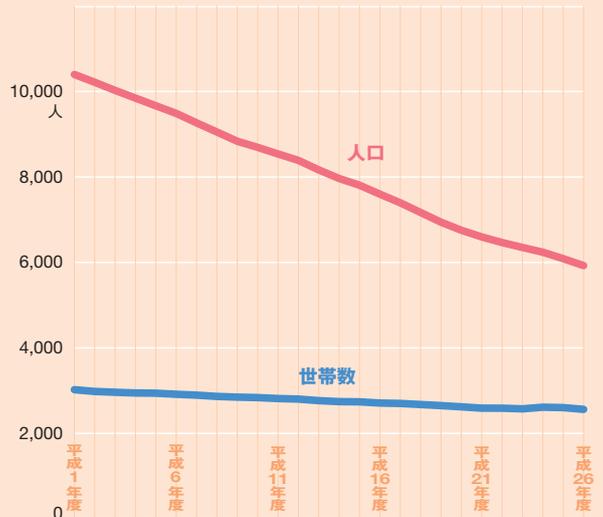


図1 神山町の人口・世帯数推移

世帯数も若干減少しているものの、それ以上に人口の減少が目立つ

### 神山町は過疎地？

なぜ移住者やサテライトオフィスを探す企業に、神山町は選ばれるまぢになつていくのか。「四国には八十八カ所巡礼の文化があるのですよ。民泊のお遍路さんには手厚いサービスをする」こう語つたのは神山町産業観光課主事(2015年3月末)の北山敬典さん。27歳、地元出身の行政マンだ。お遍路文化があるので、外からやってきた人をやさしくおもてなしする素地があるというのだ。「小学生は1学年10人くらい。実際、普通の過疎地ですよ。ここで生まれ

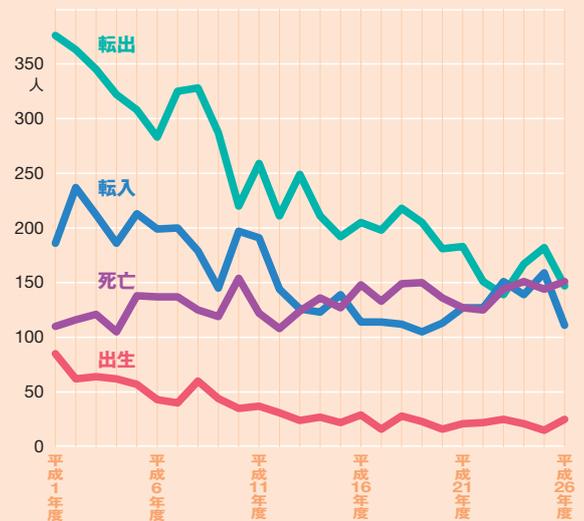


図2 神山町の出生・死亡・転入・転出数推移

平成15年度あたりから転出数と転入数の差が小さくなつていくことがわかる  
出典：徳島県統計資料より筆者作成(図1、2ともに)

た人は、地元で高校が1つしかないので徳島市内の高校に出ます。どんな転出します」といふ。たしかにデータを見てもこの四半世紀で世帯数の若干減少に比べ、人口は半減している(図1)。人口は出生、死亡、転入、転出の4つの要素の組み合わせで決まる。内訳を見てみると図2のようになる。この25年、たしかに出生数は若干の減少傾向だが、だんだんと転出数と転入数の差が小さくなつてきていることがわかる。平成16年度より神山町は国の補助金により光ファイバーが使えるようになり、オフィスも増えはじめてい



10

8・9 閉鎖された縫製工場を改修してコワーキングスペース（共同の仕事場）とした「神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス」

10 NPO グリーンバレー サテライトオフィス担当の木内康勝さん。徳島市内の実家から通っているが、神山町は遠くないので不便さは感じないという



9



8

### ゆるさの魅力

町の移住交流支援センターを引き受け、移住者・企業の受け皿となっているのがNPOグリーンバレーだ。アーティスト・イン・レジデンス事業や、神山塾という若い人たちのための職業訓練の場を運営している。私は今を生きる若い人の気持ちを知りたかったので、このNPOのサテライトオフィス担当である若手の木内康勝さん（27）にお話をうかがった。

木内さんは徳島大学卒業後、県外の企業勤務を経て、今ではこの

NPOに徳島市内から通ってきている。グリーンバレーで学んでいる場の価値を高める方法論やサテライトオフィス誘致の手法を、自分の暮らしている徳島市内でも展開したいという。

木内さんが神山町に惹きつけられた魅力は何だったのか？

「ゆるさ……ですかね」

巡礼文化があるので、神山町は人付き合いのしやすいまちだという。

ゆるさ、か。

カフェオニヴァで感じたフワッとした雰囲気を一瞬思い出した。この雰囲気、東京のビジネスシーンでは感じない空気でもある。東京で若い社会人から「ゆるいのがいい」と言われると「それではビジネスでは通用しない」と言ってしまう自分がいる一方、同じことを自然があふれ時間がゆっくりと流れる集落で聞くと、「それが本来の生活というものかな」と思ってしまう。

実は「ゆるさ」というのは、気持ちを回復に誘う魅力で、これなしでは日常生活は送れない。「巡礼の気持ち」「もてなされるありがたさ」が「ゆるさの魅力」という言葉に重なり合った気がした。

木内さんは、この神山町だからこ

そ感じられる大事な価値を気がつかせてくれた。

### ゆったり働ける、ほんものの職住近接

今、神山町で営業しているオフィスを4つ挙げてみよう。

・クラウドでの名刺管理サービスを行なっているSan-san株式会社。

本社は東京の渋谷区。その神山

ボが古民家に置かれている。

・インターネットコンサルティングを行なっている株式会社ダクソフ

フト。創業地は徳島だが本社は東京

京都中央区。

・コールセンター業務を行なっている株式会社テレコメディア。本

社は東京都豊島区。

・デジタルコンテンツ制作・アーカイ

ヴ、放送支援業務等を行なう株

式会社プラットフォームズ。サテ

ライトオフィスは「えんがわオフィ

ス」と呼ばれている。2013年

に開所し、アーカイブ業務を行な

っている。本社は東京都渋谷区。

これら企業に共通しているのは、

通信基盤が整っていれば高度なサ

ビスを提供できることで、国内・海

外の商圏を区別していない点だろう。



12



11

側で弁当を食べたり、ちよつとした料理をする。隣の敷地には寄井座という芝居小屋が今も残っている。ちなみに、このあたりに鮎喰川の船着き場がかつてはあり、そのために盛

こうした「ゆるさ」「ゆつたり」といった言葉で表現される魅力ならば、神山町をはじめとして、どこにでもあるような山里で味わえるのかもしれない。でも実際には神山町が一頭

でもそろっているように見えながら、実はモノカルチャー色が強く多様性に薄い場では味わえないものだ。その強みをNPOのリーダーは自覚しているのだろう。

ご案内いただいた谷脇研児さん(46)はここでの勤務が楽しくて楽しくてしかたがないという風。昼は縁側で弁当を食べたり、ちよつとした料理をする。隣の敷地には寄井座という芝居小屋が今も残っている。ちなみに、このあたりに鮎喰川の船着き場がかつてはあり、そのために盛

**背景にある過疎地の郊外化**  
自然に触れることで発揮できる創造性とゆるい環境。そのナマの現場の空気を吸うことができた。

たんなる企業誘致ではない。ゆつたりとしたワークスタイル、職住近接、ワークライフバランスの実践を伴うもので、おそらく東京のようななんでもそろっているように見えながら、実はモノカルチャー色が強く多様性に薄い場では味わえないものだ。その強みをNPOのリーダーは自覚しているのだろう。

実際のひとつ、「えんがわオフィス」を  
見せていただいた。外から見るとリニューアルされガラス張りにされた古民家。蔵だが、なかにはサーバーやPC、映像機器が並んでいる。仕事はデジタルコンテンツ制作と書いたが、例えば、家でテレビ番組を録画するときに番組表が映る。あれをつくっているのがこの会社だ。

り場になったとのこと。  
本来の仕事が忙しかどうか、私には窺い知れなかったのだが、少なくとも多くの地元社員の皆さんがゆつたりとした気持ちでディスプレイに向かってるように見えた。

その理由として、早期の高速通信回線の導入や、NPOグリーンパレの戦略的活動が成功したという側面もあるのだろう。企業は、過疎地の強みである「自然」という価値に惹かれて誘致され、サテライトオフィスをつくっている。しかもそれはたんなる企業誘致ではない。ゆつたりとしたワークスタイル、職住近接、ワークライフバランスの実践を伴うもので、おそらく東京のようななんでもそろっているように見えながら、実はモノカルチャー色が強く多様性に薄い場では味わえないものだ。その強みをNPOのリーダーは自覚しているのだろう。

11 東京都渋谷区に本社のある株式会社ブラットイーズが古民家を改修して設立したサテライトオフィス「えんがわオフィス」

12 えんがわオフィスのすぐ隣にある芝居小屋「寄井座」。天井広告が印象的。今もアートの拠点となっている



13

13 えんがわオフィスの統括マネージャーを務める割石芳司(わりいしよしじ)さん(右)と谷脇研児さん(左)。割石さんは東京から異動してきて間もないが、神山町の暮らしを楽しんでいる



14

14 えんがわオフィスの内部。テレビがたくさん据えられていて、本社と同じ業務を行なっている。ランチはみんなで自炊したり、庭先で食べたりと、都会暮らしにはうらやましい職場環境だ



15

15 本棟の向かいに建てられた新築の「アーカイブ棟」。すき間をかけた最新の空調設備を持ち、アーカイブ業務に使われている



高台からの神山町の風景。蛇行しているのは鮎喰川



クルマなら20分ほどで伊予街道に出られる。そこは国道沿いに店がひしめく「ロードサイドショップ回廊」。この利便性が神山町のアドバンテージの1つにもなっている

とはいっても、人間はお人好しではない。自分のものさしで合理的な選択をし、仕事がない、不便なところからは流出していく。

ならば、神山町にはなぜ人が流入してきているのか？

それは神山町が自然の魅力にあふれているだけではなく、便利な場所になったからだ。

20分ほど流していれば、ほぼ日常の用事は済んでしまう。都市研究者の誰もが眉をひそめるロードサイドショップ、すなわちクルマ社会での生活基盤が非常に発達しているのが徳島で、これが吉野川流域に回廊のように延びて中流域までつながっているのだ。

第一で働いてきたこれまでの常識を問い直すきっかけになる。私のような都市居住者の多くは、これまで働くところと寝る場所は別で（職住分離）、互いに離れ、休養のために自然に触れにくくするためには時間をかけて山中や海に行かねばならなかった。

こんな常識でできあがってきた日本の国土だが、職住近接エリアが山のふもとと奥でつながったらどうだろうか。いわば、東京でいえば勤務先の新宿に吉祥寺から通っている人、その吉祥寺が山のなかにあるイメージだ。しかも、山奥の方には新たな働き方の、ローカルとグローバルを区別しないおもしろい企業がある。

実際に徳島空港から市内を経て神山町にアプローチするとわかるが、徳島ほどクルマのための生活基盤が整っているところはない。言い方を変えると、醜悪な景観と嫌がられるロードサイドショップがそろうているのだ。イナカの生活者は歩いて買い物など行かない。

このため徳島市中心市街地はシャッター通りとなり壊滅状態だ。

神山町はこの伊予街道沿いの石井町からクルマで20分ほど鮎喰川沿いに上った場所にあるし、県道のトンネルもここ数年で整備され「便利な過疎集落」になっていたのだ。

ロードサイドショップの回廊が内陸まで帯状に発達したため、徳島市中心市街地は壊滅したが、逆に、吉野川を取り囲む山中集落がいわば郊外化していったともいえる。郊外化といっても大都市周辺のようにびっしりとベッドタウンが広がっているのではなく、山のなかに出現した郊外が神山町なのだ。

「ゆるさ」で体现された価値が、そのような魅力ある場だとすれば、神山町のような郊外の山のなかまもなかなか悪くない。

でもそんな徳島市の中心地から、吉野川沿いに伊予街道をクルマで上流に向けて走ると、意外なことに気がつく。美馬市までの約40km、1時間ほど走っていたが、いつまでたってもロードサイドショップが途絶えないのだ。

スーパーマーケット、各種量販店、コンビニエンスストア、銀行、病院、ドラッグストア、100円ショップ、レストランなど、おそらくこの道を

ロードサイドショップ回廊という流域観は、今後の地域政策を変えていくかもしれない。

**職住の関係、日常と休暇の関係が変わる兆しか**

こういう現象に遭遇すると、仕事

**〈魅力づくりの教え〉**

ロードサイドショップ回廊の流域山中で、ICTを武器にした企業が地元の生活に寄り添って活動する時、ゆるさの魅力は生まれる。

(2015年3月29〜30日取材)

## 川と人が保つ〈ほどよい距離感〉

## 那珂川

(茨城県・栃木県)

川系男子 坂本貴啓さんの案内で、編集部の方々  
 全国の一級河川「109水系」を巡り、川と人とのわか  
 わりを探りながら、川の個性を再発見していく連載です。

関東地方の川といえば多くの人の頭に真っ先に浮かぶのは利根川、荒川、多摩川などだろうと思います。しかし那珂川は関東地方では利根川に次ぐ規模で、水源を栃木県那須岳に発し、大洗までの150kmを水は滔々と流れています。川風景は関東の嵐山といわれるほどで、川のどこか一地点をとっても美しい川風景が広がっています。

そんな那珂川ですが、ひと言で言うならば、川と人が上手なつきあいをしてきた川だと私は考えます。水に困っていた上流域の那須野ヶ原では必要な分だけ人に水を与えてきました。人も必要以上に水を求めなかつたため、全川にわたり、ダムや堰などの横断構造物も少ないのです。また、那珂川はたびたび洪水を起こしてきましたが、人々は堤防を築きすぎて那珂川の自由を奪うことなく、一定のあふれる場所を許容し、住む場所を選んできました。

近世においては川の流量と流れをうまく利用し、舟運によって東北と江戸との幹線交通として活用するなど上手につきあってきました。今回は川づきあいを学ぶべく、那珂川とその流域の人を訪ねました。

## 川名の由来【那珂川】

村石利夫編著『日本全河川ルーツ大辞典』（竹書房 1979）によると、中川とも書かれ、常陸（茨城県）、那珂郡を通る川というが、ナ力は茨城と久慈の中間の意をもつという。

## 109水系

1964年（昭和39）に制定された新河川法では、分水界や大河川の本流と支流で行政管轄を分けるのではなく、中小河川までまとめて治水と利水を統合した水系として一貫管理する方針が打ち出された。その内、「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したもの」（河川法第4条第1項）を一級水系と定め、全国で109の水系が指定されている。

## 那珂川

水系番号	: 27	
都道府県	: 茨城県・栃木県・福島県	
源流	: 那須岳 (1915 m)	
河口	: 太平洋	
本川流路延長	: 150 km	20位 / 109
支川数	: 197 河川	19位 / 109
流域面積	: 3270 km <sup>2</sup>	18位 / 109
流域耕地面積率	: 21.7 %	12位 / 109
流域年平均降水量	: 1521 mm	76位 / 109
基本高水流量	: 8500 m <sup>3</sup> /s	36位 / 109
河口の基本高水流量	: 1万2744 m <sup>3</sup> /s	24位 / 109
流域内人口	: 92万2613人	18位 / 109
流域人口密度	: 282人 / km <sup>2</sup>	32位 / 109

(基本高水流量観測地点: 野口(河口から38.3km地点))  
 河口換算の基本高水流量 = 流域面積×比流量 (基本高水流量÷基準点の集水面積)  
 データ出典: 『河川便覧 2002』(国際建設技術協会発行の日本河川図の裏面)

写真: 母性的な美しさをもつ那珂川の下流域



## 坂本 貴啓 さん

さかもと たかあき

筑波大学大学院

システム情報工学研究科 博士後期課程

構造エネルギー工学専攻 在学中

1987年福岡県生まれの川系男子。北九州で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ちはじめ、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC（青少年博物学会）、大学時代にはJOC（Joint of College）を設立。白川直樹研究室「川と人」ゼミ所属。河川市民団体の活動が河川環境改善に対する潜在力をどの程度持っているかについて研究中。

### 【那珂川流域の地図】

国土地理院基盤地図情報「茨城県、栃木県、福島県、千葉県、埼玉県」及び、国土交通省国土数値情報「河川データ（平成20年）、流域界データ（昭和52年）、ダムデータ（平成17年）、鉄道データ（平成25年）」より編集部で作図。この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の基盤地図情報を使用した。（承認番号 平27情使、第203号）





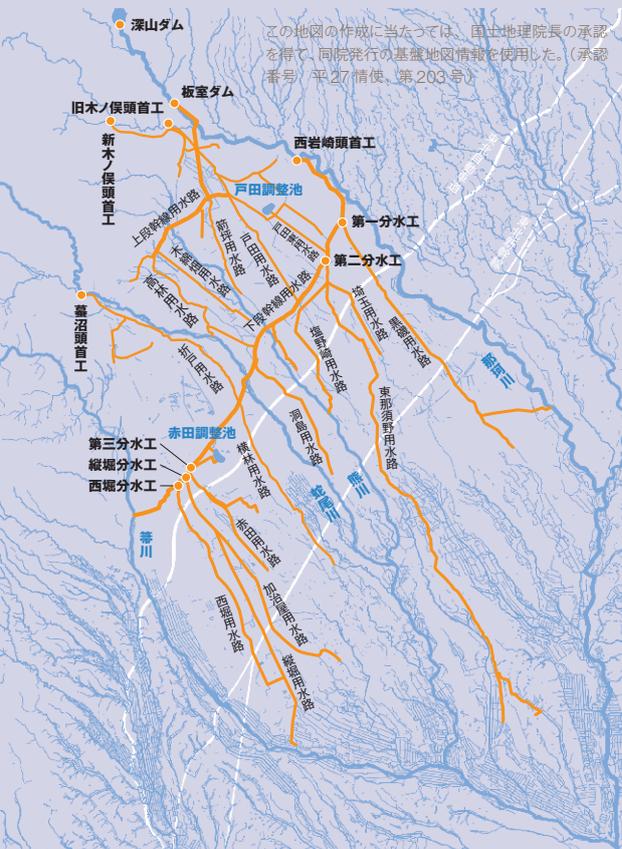
日本三大疏水の1つに数えられる那須疏水の取水口「西岩崎頭首工」。河床の変化によって取水口は何度も移設された。今の取水口は1975年（昭和50）の竣工



那須野ヶ原土地改良区連合の飯塚康人さん（左）と郡司忠之さん（右）  
左：水が地下に浸透して、干上がったように見える蛇尾川。地面に耳をつけてみたが、残念ながら地下水の音は聞こえなかった

## 那須野ヶ原悲願の水資源開発

那珂川の流域には那須野ヶ原と呼ばれる約4万haにわたる台地が広がっています。この地域はいくつもの扇状地が重なり合っていてきている複合扇状地であり、国内最大級の規模です。扇状地帯の特徴として扇央部（扇状地の中央部）では水が地下に



### 那須疏水

那須野ヶ原の水路網（那須疏水）。1967年（昭和42）から1995年（平成7）まで続いた「那須野ヶ原総合開発」によって今の姿になった

出典：「なすのがはら総合開発マップ」及び、国土地理院基盤地図情報「栃木県」、国土交通省国土数値情報「河川データ（平成20年）」、鉄道データ（平成25年）、高速道路データ（平成25年）」より編集部で作図



潜るため、地表に水が流れない水無川となり。扇央部に住む人々は水を得るのに苦労してきました。那須野ヶ原土地改良区連合の飯塚康人さんと郡司忠之さんにこの地の水利用の変遷についてお聞きしました。「那珂川と箒川に囲まれている部分が那須野ヶ原の扇状地です。那須疏

水開削前の明治初期は水を取るのが困難で、『水の一滴は血の一滴』と言われたほど。扇状地のなかの蛇尾川と熊川は雨が降っていないときは水が浸透してしまい地下を流れています。ですから扇状地のなかは人が住めるようなところではなく、水の流れている川まで何kmも歩いて水を汲みに行ったこともあるようです」

上：西岩崎頭首工から少し下ったところにある「第一分水工」。ここで南東に流れる黒磯用水路と、南西に向かう下段幹線用水路（那須疏水幹線）に分かれる

下：田植えを目前に控えた那須野ヶ原の水田。こうして水が張れるのも那須疏水のおかげだ



大田原市なす風土記の丘湯津上資料館館長の木村康夫さん  
那珂川の右岸にある前方後方墳「侍塚（さむらいづか）古墳」。江戸時代に徳川光圀が発掘・調査した

那須烏山市の境橋から見た那珂川の夕暮れ（中流域）

私はいろいろな扇状地帯の川を見してきましたが、風が吹くと河道内に砂煙が巻き起こる様子はまるで川砂漠で、初めて見た風景でした。これを解消するため、当時の明治政府は1881年（明治14）～1885年（明治18）にわたり画期的な開削事業を行ないました。これが日本三大疏水とも評される那須疏水のはじまりです。

「西岩崎頭首工（注1）から箒川まで一本幹線を掘り、その途中に第一分水工（注2）、第二分水工、第三分水工、縦堀分水工、西堀分水工をつくり、水を扇状地内に行き渡るようにしました。その後も1967年（昭和42）から1995年（平成7）まで続いた国営事業により、今日の安定した水供給につながっています。現在、那須野ヶ原約4万haのうちの約4000haが那須疏水の受益地（注3）です。この地は明治期以降の那須疏水の国営事業によって水がいくようになったと言っても過言ではありません」

訪ねたときはちょうど代掻き期（注4）で、那須野ヶ原の田んぼ一面に水が張られ、那須疏水も勢いよく流れていました。わずか4年で乾ききった表層に水の潤いを与えたと思

うと、人の創造力や実行力とは驚異だとさえ思っています。

## 文化を運び育てた交易の場

那須野ヶ原扇状地を抜けると中流域の那珂川の風景は一変します。水がよどみなく流れ、掘り込みの深い谷底を川が流れています。八溝山地の西麓を流れ、那須烏山付近からは山地に囲まれた狭窄部となつています。そんな地形から川風景も風光明媚で、黄昏時に眺めるにはもってこいです。

そんな中流域では、那珂川の舟運文化をたどることができます。

江戸時代、東北からの米や木材などを江戸まで運ぶことで注目されたのが那珂川でした。那須から水戸までの100km以上を舟で運ぶことができ、運搬路として重要な役割を果たしました。

中流域の暮らしを大田原市なす風土記の丘湯津上資料館館長の木村康夫さんにかがいました。

「中世の那珂川は舟運で奥州の方から運んできた米や木材を江戸や水戸に持っていきました。帰りは海産物をたくさん乗せて川を遡りました。上流域の人は海産物のなかでも塩漬

けにした魚を大量に買いました。塩は高価だったので、魚についている塩を集め、それでにがりをつくり、豆腐や味噌をつくるんです。そういう海と山との交流がありました」

交易路だったからこそ那珂川沿いにいろいろな食文化や伝統、習慣が副産物として残ったのでしょうか。さらに木村さんはこう続けました。

「那珂川沿いには古墳が多いのですが、不思議なことにはほとんどが川に平行して立地しています。それはおそらく防衛拠点、それと同時にディスプレイとして通る人に権力を見せつけたのでしょう。ですから烏山藩、大田原藩や中世の那須氏が川沿いに領地をもつたのだと思います。いつの時代もそこに那珂川があった。これは今も昔も変わりません」

川沿いに立ち当時に思いを馳せると、いろいろな時代風景が見えてきます。ある時は川を上り下る者が周囲の権力の象徴に息を飲み、ある時は何艘もの舟が行き交い、自分の国の特産品が江戸で認められることを願って下り、手に入りにくい海産物や嗜好品を持ち帰る光景。それぞれの時代の河川文化の一端が感じられるのはすばらしいことだと思います。

### （注4）代掻き期

田植えのために、田に水を入れて土を碎いてかきならす作業を行なう時期のこと。

### （注3）受益地

事業によって利益を受ける地域のこと。

### （注2）分水工

幹線水路の水を支線に分ける施設のこと。

### （注1）頭首工

湖沼、河川などから、用水を取入れる農業水利施設の総称。主に取水堰と取り入れ口（取水口）からなる。



那珂川は舟運が盛んで、かつては各所に川湊があった。写真は1919年(大正8)の那珂湊「万衛門川の船だまり」。万衛門川是那珂川の支流である(写真提供:水戸市立博物館)

## 水戸の発展と人々の暮らし

那珂川流域で最大の都市が下流域にある水戸です。親藩で知られる水戸藩是那珂川とさまざまなかわりをもっていました。

水戸市立博物館館長の玉川里子さんは、水戸と那珂川には大きく4つのかかわりがあると言います。「1つめは、那珂川は交通の基幹でした。上流域との人の行き来や物資の運搬は盛んでした。そして、東京湾に入る鹿島灘のあたりは波が荒くて危なく、内水を通った方が安全だったので、河口の那珂湊から酒沼に入り、少し陸送して霞ヶ浦を通じて利根川、江戸川に入っていくという内川廻りがとられていました。支流の酒沼川には北浦まで水路を掘ろうとした水路跡(勘十郎堀)が残っています」



### 那珂川から江戸へのルート

那珂川の舟運は、水戸、那珂湊、酒沼を経て江戸とつながっていた  
出典:「特別陳列 那珂川の交通史」パンフレット(水戸市立博物館発行 1997)を参考に編集部作成

ます」

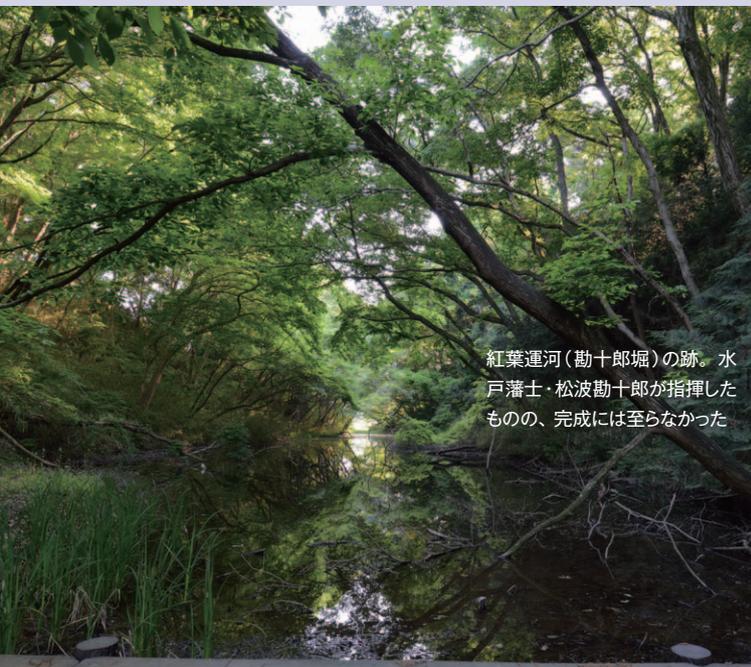
これは関東を俯瞰した大水路ネットワークで、その一部が那珂川水系でした。松浪勘十郎に工事を命じた紅葉運河(勘十郎堀)跡を見ても相当な川幅です。水戸藩が那珂川を使い、江戸とのつながりをよくしようとしていたことが伝わってきます。

「2つめは水戸城の外堀の、要塞としての役割です。水戸城の南は千波湖、北是那珂川でした。これを基軸に城の防御を固めました。また城からの高台の上町と城の東側の低い下町が、それぞれに発展していく双子町となりました。その土地利用の跡は今もよく残っていますよ」  
川と湖に囲まれた台地。城下町をつくるには最適だったのでしょうか。  
「3つめは水戸城近くでの鮭漁。水戸城の近くに鮭留めを設け、そこで

鮭を捕り、水戸藩は朝廷や幕府に献上していました」

水戸の特産品の1つが鮭だったとは少し意外な感じがします。今でも那珂川には秋になると多くの鮭が産卵のため遡上します。

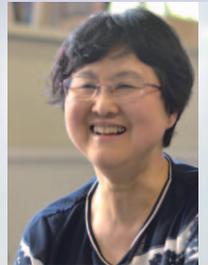
「4つめは水泳を覚える水場です。水戸藩には古式泳法の水府流水術というのがあります。音もなく楽に泳げるので武道の一環でもありました。泳ぎを覚えるのも那珂川で、私も小さいころに親に教わりました。水戸は小学校にプールができるのが遅くて、長いあいだ川で泳いでいました。平泳ぎが横を向いた感じですよ」  
後日、私も試してみました。なかなかそれっぽく泳げませんでした。普通の平泳ぎに慣れているせいか逆に難しかったです。ところが水戸出身の研究室の後輩に「水府流って知



紅葉運河(勘十郎堀)の跡。水戸藩士・松波勘十郎が指揮したもの、完成には至らなかった



那珂川から江戸をつなぐルートだった酒沼。2015年5月28日、ラムサール条約湿地に登録された右:水戸市立博物館館長の玉川里子さん



「つてるか？」と尋ねると「そういえば昔、じいちゃんに教わりましたよ」とスイスイと泳いでみせてくれました。水戸藩の古式泳法は今も水戸市民に継承されていました。

水戸という言葉自体が海への入り口という意味で、川と海との接点を表します。那珂川とは親しみ深い都市でした。

## 堤防の少ない川

中流域の川風景も美しいですが、川が開けてくる下流域は母性的で開放感ある美しさです。川風景を決定づける要素は大別すると、川幅、川沿いの建物や草木の高さ、周囲の土地利用、空の開け具合などがあると私は考えます。那珂川の川風景を見てほっとするのは、那珂川の特徴の1つでもある「堤防が少ないこと」ではないかと思えます。

那珂川で現在、治水に取り組む河川管理者（国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所調査第一課長）の岩瀨光生<sup>あきみつ</sup>さんに話を聞きました。

「那珂川流域で一番人口が集中している水戸市街地は堤防が少ないのです。那珂川水系において国が管理しているところでは、堤防の完成した

箇所が全体の約24%、まだ堤防がないなどの未完成の箇所が約41%、堤防が必要ない箇所が約35%です。1947（昭和22）のカスリーン台風を契機に全国的に堤防の整備が進んだのですが、水戸市は市街地の堤防整備はそれほど進んでいません。1986年（昭和61）8月の台風の影響を受けてようやく堤防整備が進んだ状況です。1947年以降、1986

年クラスの大水を超える洪水がなかったというもあり、その間に住宅がなかったところに人が住むようになったのです。1960年代は水戸城下の高台付近しか市街化が進んでなかったため堤防の必要性が現在よりも薄かったのですが、1980年代には市街化が川のそばまで進行してしまいます。そこに大きな洪水があつて市街地をしっかりと守つていかなければいけなくなつた。今も最下流付近は堤防がなく整備を進めているところですよ（下段右の写真参照）

那珂川流域は田園地帯の河川の様相が強いです。人は高台や川から少し離れたところに住むという領域を意識した暮らしが那珂川にはありましたが、市街地が川のそばまで広がつたことで1986年、1998年（平成10）と二度にわたり水戸市内で

大水害が起きました。川と人の領域が少しずつ変化しつつあるのでしよう。

岩瀨さんは河川管理者としての付き合い方を語ってくれました。

「河川法に基づいて、われわれの仕事を見ると、治水・利水・環境の視点がありますが、那珂川の特徴は環境の豊かさだと思います。アユの遡上数も年によっては日本一ですし、涸沼川の方ではヤマトシジミ、ヒヌマイトトンボなどの生物を育む豊かな川です。河川管理者は環境のいいところは保全する、昔あつたならば再生することを主眼に河川改修に努める。それが基本スタンスですね」

## これからの那珂川との川づきあい

荒野を潤す水源として、舟運の要として、要塞としてなど、那珂川はさまざまな顔をもっていました。また関東屈指の大河でありながらこれだけの清流が残っているのはすばらしいことです。これからも清流を維持していくには、私たちが川と人のほどよい距離感を保つていくことが大事なのだとな珂川に学びました。

（2015年5月7〜8日取材）

堤防のない那珂川の河口から海門橋（かいもんばし）を望む



1998年8月の那珂川水害を受けてつくられた堤防から見た水府橋。手前は撤去中の初代・水府橋。老朽化および河川改修上の阻害箇所となっていたことから架け替えられ、2013年10月31日に二代目・水府橋が開通した

右：国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所調査第一課長の岩瀨光生さん



## ミツカン水の文化センター ホームページ コンテンツ紹介

# 自分でも開催！里川文化塾

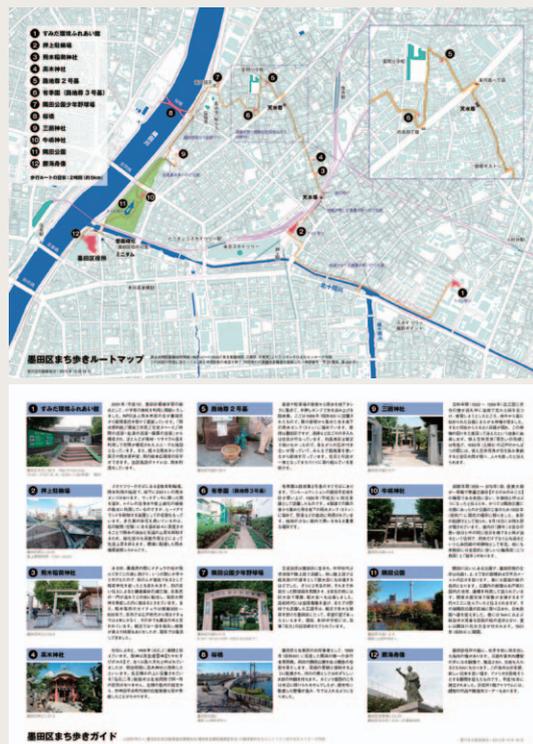
<http://www.mizu.gr.jp/bunkajuku/know-how/index.html>

ミツカン水の文化センターが2011年9月から続けている「里川文化塾」。これまでの開催で培ってきたフィールドワークなどの体験型イベントのノウハウをまとめました。

開催当日に巡ったルートマップや見所を解説したガイドをPDFとしてダウンロードできます。それを片手に、実際にフィールドを歩くことで、その土地と暮らしの結びつきから「使いながら守る水循環」を体験できる情報をそろえました。ぜひご利用ください！

### 【公開中のルートマップ & ガイド】

- 01 **歩いて知るニヶ領用水**〈第5回里川文化塾 ニヶ領用水フィールドワーク〉
- 02 **日野・向島用水エリアを巡る**〈第9回里川文化塾 水の郷・日野を歩く〉
- 03 **荒川・岩淵水門周辺のまち歩き**〈第10回里川文化塾 船でゆく荒川〉
- 04 **源流から野川をたどる**〈第11回里川文化塾 野川を歩く〉
- 05 **浅川の治水と八王子巡り**〈第14回里川文化塾 大久保長安・八王子の治水とまちづくり〉
- 06 **雨水利用施設を巡る墨田区まち歩き**〈第15回里川文化塾 拡がる雨水利用〉



ルートマップとガイドは、基本的に里川文化塾を実施した時点の情報をもとに作成しています。ご了承ください

# 水の風土記「人ネットワーク」

<http://www.mizu.gr.jp/fudoki/>

〈水の風土記〉では、魅力あふれる独自の「水の文化」を培っている「人」や「事・場」をお訪ねして、そこで行なわれている研究や活動をホームページで紹介しています。機関誌の特集テーマではなかなか取材できない「人」や「事・場」を、軽いフットワークでお訪ねするのが特徴です。「人」をフォーカスしてインタビューするのが、〈水の文化 人ネットワーク〉、「事（こと）や場（ば）」を掘り下げてレポートするのが〈水の文化 事・場（ことば）ネットワーク〉です。〈水の風土記〉でご紹介することで、活動の輪がつながり合うことを目指しています。

随時更新していきますので、どうぞご覧ください。

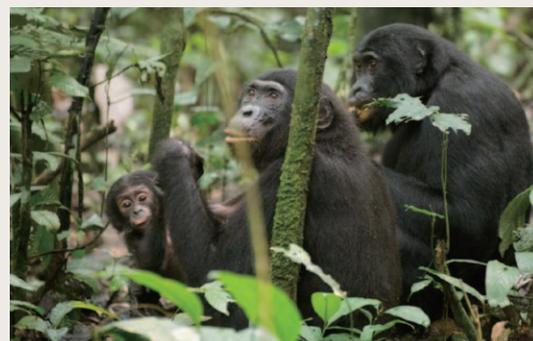
### 【最新インタビュー】

## ヒトが「ボノボ」から学ぶこと ～コンゴ川を渡った平和主義者たち～



**古市 剛史** さん  
ふるいち たけし  
京都大学霊長類研究所  
教授

「ボノボ」という類人猿をご存じでしょうか。サル目（霊長目）ヒト科チンパンジー一属に分類され、アフリカ中央部の赤道付近に広がるコンゴ盆地に住んでいます。チンパンジーとよく似た外見をしていますが、オスが好戦的なチンパンジーに比べて、性質はとても穏やかで争いの少ない社会をつくっています。実は、この両者を分けた要素の1つとして水（コンゴ川）があります。ボノボやチンパンジー、ゴリラ、ニホンザルなど野生霊長類の生態と行動を研究している古市剛史さんに、ボノボと水のかかわり、さらに平和的な生態とそれを可能にしている理由についてお聞きしました。



### お知らせ

『水の文化』49号の記事について、物部川漁業協同組合さまから「水の文化書誌」p35本文3段目28行目以降、高橋勇夫著『天然アユが育つ川』（築地書館 2009）の記事部分について、「著者が提案しています『物部川漁協推薦 天然アユ 100% 物部川清流米』について、物部川漁業協同組合といたしましては、推薦をしたこと、農協さまと販売の検討をしたこと、および予定はございません」とのご指摘をいただきましたのでお知らせします。

ミツカン水の文化センター

# 水の文化 Information

## ■「水の文化」に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

## ■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください。

<http://www.mizu.gr.jp/>

## ■水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

## ■里川文化塾レポート詳細版は、ホームページで

里川文化塾のレポート詳細版は、参加できなかった方も楽しめる内容です。今後の企画についても、順次ホームページでご案内します。ご注目ください。

## メールマガジン配信中！

# 「里川だより」

ミツカン水の文化センターは、時期やテーマに沿ったさまざまな「水の文化」にかかわる情報を盛り込んだメールマガジン「里川だより」を配信しています。

「里川だより」では、機関誌の発行や里川文化塾の募集告知など、センターからの情報をいち早くお届け。1人でも多くの人にご覧いただきたいと考えております。

メールマガジンの配信をご希望の方は、タイトルに「水の文化センターメルマガ配信希望」と記載して「[tokyo-office@mizu.gr.jp](mailto:tokyo-office@mizu.gr.jp)」までメールをお送りください。

ご連絡をお待ちしております！

## 編集後記

当時頑張って買った傘を忘れて以来、ずっとビニール傘だった。今回取材先で実に様々な傘に出会い、その機能と技術に驚き、デザインには楽しさを感じた。自分ではなかなか手が出ないような素敵な傘をプレゼントにはどうだろうか。大切な人に傘の下の空間もあわせて。(後)

晴天でも傘を差したがる子供を説得するのに苦心する梅雨どき。傘を差せば、雨の中をぬれずに自由に歩き回れる・・・子供の頃は、そんな傘の空間が持つ魅力を、無意識に感じ取っていたのかもしれない。次の雨天に息子と相合傘をして、更なる傘空間の魅力を教えようかな。(松)

幼い頃、お気に入りの傘を置き忘れてから「いい傘を買ってもどうせなくす」と傘にこだわることをやめてしまった。今は正直、出先で雨に降られる度に増える傘に辟易している。日本の素晴らしい傘文化を知った今、もう一度こだわりの一本を見つけ、そんな生活をぜひ脱却したい。(原)

何気なく使っているようで、意外とこだわりを持っている傘。日本人はさりげないこだわりを、たくさん持っているような気がする。そんな私も傘にはちよつとしたこだわりがある。梅雨明けまであと少し。お気に入りの傘と一緒に、この梅雨空を楽しみたい。(吉)

取材ではいつも晴れてほしいと願っているが、結構な確率で雨が降る。でも今回に限って雨はたった一日だけ……。せっかく買った傘も取材では役立たせる機会がなかったが、これからの梅雨の季節、積極的に出かけたと思う。(力)

子どもたちが羨ましいときがあります。例えば雨の日。大人と違って子どもは雨が大好き。長靴で水たまりを歩き、傘をぶんぶん振り回す——今号はそんなイメージの表紙にしました。そういえば、リサーチ先で見つけた長傘を買って「雨、降らないかな〜」と思う自分が……。傘のおかげで、ほんの少し童心を取り戻せたようです。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

# 水の文化 第50号

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中塾ビル 4F

株式会社 Mizkan Holdings

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ

ミツカン水の文化センター 事務局

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町 1-11-3 中銀 NM・5F

Tel. 03 (6264) 9471 Fax. 03 (6685) 7596

発行日

2015年(平成27)6月

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授

古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会

陣内秀信 法政大学教授

鳥越皓之 大手前大学副学長

中庭光彦 多摩大学教授

制作

後藤喜晃

松本裕佳

小林夕夏

原田朱野

吉田奈保子

編集製作

前川太郎 編集

編集製作

中野公力 デザイン・撮影

執筆

佐々木 聖 (pp.6-9, pp.12-19)

手塚ひとみ (pp.26-28)

前川太郎 (pp.29-32, pp.36-37)

安田博勇 (pp.20-25)

撮影

大平正美 (pp.30-32)

川本聖哉 (pp.4-5, pp.12-19, pp.26-28)

篠田 勇 (pp.26-28)

鈴木拓也 (p.2, pp.36-37)

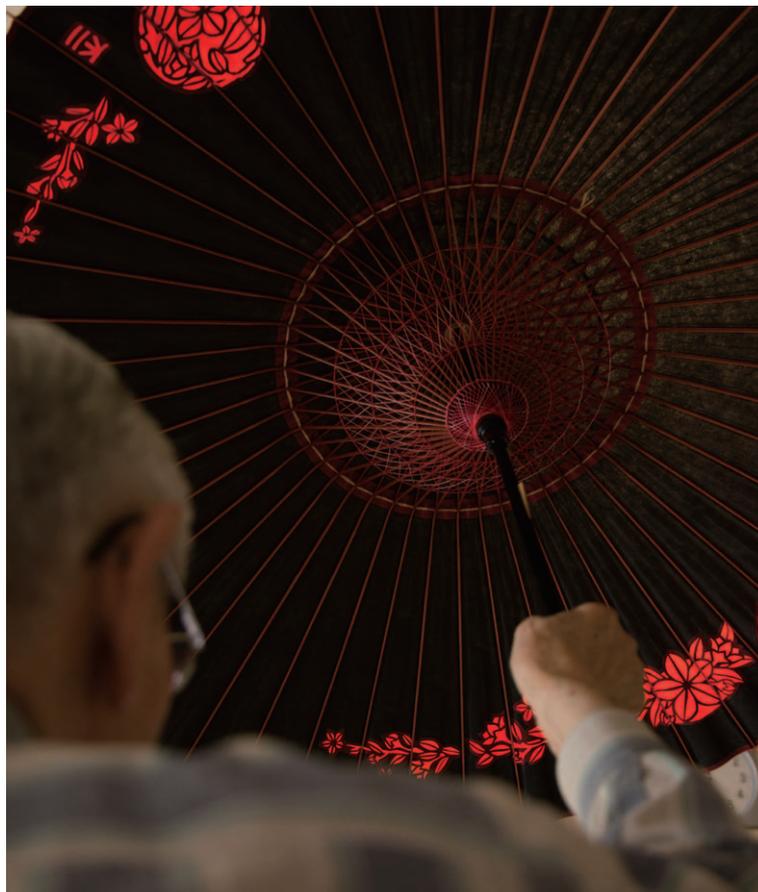
中野公力 (pp.44-49)

藤牧徹也 (p.6, p.20, pp.22-25, pp.38-43)

印刷

中塾総合印刷株式会社

※禁無断転載複写



## ミツカン水の文化センター

表紙：子ども、特に男の子は雨が降っていても外に行きたがる。そして、いつもとは違う風景を心の底から楽しんでいる。雨を鬱陶しいなんて思うのは、きっと大人だけなのだ（撮影・鈴木拓也）

裏表紙上：マルト藤沢商店の藤沢健一さんが切り抜き加工をした和傘。赤く見える花模様は、平紙上で模様を切り抜き、模様より一回り大きく切った当て紙（赤）を裏から貼っている（撮影・川本聖哉）

裏表紙下：『三めくりの夕立』 夕立に遭い、慌てて三囲（みめぐり）神社（東京都墨田区）に駆け込む人々を描いている。右端の女性は番傘を持ち、蛇の目傘を抱えている。真ん中の男女が持つ青い傘は、夕立によって一部が破けているため日傘と思われる。歌川国貞 画／19世紀中ごろ（岐阜市歴史博物館蔵）

